

丹波佐吉の石造物とその一生

磯 辺 ゆ う

The caved stones by Sakichi of Tanba and his life

Yu Isobe

はじめに

幕末に生きた石工丹波佐吉は狛犬名人として知られている。その狛犬について、新規発見のものも含めて全て記載し、その形態の特徴と変遷から全体をV期に分け、狛犬の制作に関わるいきさつについて、先に論じた^{1), 2)}。その中で第IV期については、狛犬だけからでは理解が困難であった。一方、佐吉は狛犬のほかに多数の石仏や、いくつかの永世燈、道標、キツネ、墓石などを残している。それら全体の中で、佐吉の銘が入る最初と最後は石仏である（共に不動明王）。特に最初の不動明王を含む宇陀市大師山四国八十八箇所石仏群では、チームで100体ばかりの石仏を作っており、重要である。佐吉は、大師山の後、狛犬に大きな情熱を傾けるようになっていくが、最後に再び不動明王を作っている。これら狛犬以外の石造物もまた佐吉の制作姿勢について理解するために重要である。

佐吉の一生とその人物像については、金森氏³⁾が詳述しており、佐吉の人となりをかなり奇矯な人物として描いている。特に育ての親であった難波伊助（初代金兵衛）の息子である二代金兵衛に対しては終生嫉妬にまみれ、故郷に対して複雑な思いをもっていたと描いている。しかし、狛犬とその他の石造物を合わせて考えると、私は佐吉の人物像はもっと違うのではないかと考えるに至った。

ここでは佐吉の作として新たに3件を付け加え、佐吉のその他の石造物を中心に紹介して、その時々で佐吉がどういう考えにあったかを考察したい。石造物は狛犬もあわせて分類せずに年代順にあげる。ただし狛犬の詳細についてはここでは取り上げないので、磯辺^{1), 2)}を参照されたい。大師山石仏群については、数の多さと内容からここに全てをあげ得ないので、代表的なものだけに留めておきたい。この石仏群については、また別な機会を得て紹介しようと思う。また、奉納年代不明のもので、金森氏³⁾とは異なる判断をした場合がある。それらの時期の判断のためには、佐吉の幼時から最後まで状況と二代金兵衛との関係が重要になってくる。さらに狛犬第IV期の理解には、その他の石造物と佐吉の人となりと深く関わるので、ここでは佐吉と重なりあう時代の二代金兵衛の作を合わせて紹介しながら、佐吉の一生を追って記述していくことにする。

1、幼時

佐吉が生まれた但馬竹田（兵庫県朝来市和田山町）は城のある山裾と円山川に挟まれた細長い町であ

る。中央に大通りが1本通っている。戦国時代の代表的山城である竹田城の城下町として作られ、今も山の頂上にある竹田城の石垣を町から望むことができる。竹田の町は、関ヶ原の戦いの10年後（慶長15年1610）の大火と翌年の洪水で全て失われ、後に宿場町として再建されたが、織豊時代の城下町の名残が現在もみられる⁴⁾。

佐吉は幼時両親を失い、町の有力者であった若松屋平位久左衛門にしばらく養われた⁵⁾。“元は日下氏”⁶⁾といわれており、由緒のある家柄である。妹がおり、若松屋と一緒に保護されていた³⁾。そして佐吉は5歳の時（文政3年1820）に渡り職人の難波金兵衛伊助に連れられて、石工への道をたどることになる⁶⁾。若松屋久左衛門の墓を後に彫っているのは、この幼時に世話になったことへの礼である。当時若松屋では、養子に入っていた当主の八代目は27歳であった。そして九代目が生まれたのが天保3年（1832）で、佐吉5歳の時から12年後のことである。これによって、金森氏³⁾は、跡継ぎのなかった八代目が、ひょっとすると跡継ぎとしてもかまわないくらいの気持ちで佐吉を養っていたのではないかと推測している。妹が後に亀岡の造り酒屋に入ったかもしれないという伝承も考慮してのことである。血筋は良いが貧しかった佐吉の両親がなぜ亡くなったのかはわからないとしている。

当時、若松屋があったのは細長い竹田の一番上流側の新町であり、佐吉の家があったのは最下流側の下町末端である³⁾。竹田は円山川の氾濫によく襲われている。「南但竹田」⁵⁾によれば、文政2年（1819）（佐吉4歳）にも洪水があり、町は泥海となりその後の疫病もあわせて大きな被害を受けたらしい。この洪水は「竹田の災害史」⁷⁾にあがってこない。しかしそこに挙げられているのは余程大きなものだけで、他にも多くの災害があったに違いない。また「南但竹田」の記述では、文政2年の洪水時、町の最上部町頭の堤防が崩れた。より古い「朝来志」⁸⁾によると町頭の堤防は、後の安政2年（1855）郡の補助を以て築造され、明治22年（1889）8月26日暴風雨によって決壊したということである。この堤防については、しっかりとした堤防が無かったにしても、文政2年当時自然堤防的なものがあったと考えてもよいだろう。もしも、「南丹竹田」の記述を受け入れるなら、町の最上流部で水があふれると、水は町を上から下に抜け、特に下町のあたりを泥海としたに違いない。町の末端にある佐吉の家は、ひとたまりもない。時期から考え、佐吉の両親はこの洪水あるいはそれに続く疫病で亡くなったのではないだろうか。

竹田は水利が悪く、洪水では泥海となり、いったん火事があると大火となりがちであった。「南但竹田」によると、上町に住んでいた絹屋治左衛門は、この洪水の後、水路建設について長年にわたって尽力し“絹屋溝”（着工 文政7年1824 4月3日）を完成するに至っている。ただし「竹田誌」⁹⁾では、“絹屋溝”建設動機について、洪水ではなく火事との関連で述べており、ここでも「南丹竹田」とはやや印象が異なる。ともあれ、町の有力者は絹屋のように折にふれ町の困窮に際してそれぞれに尽力したと思われる。上流部新町にあった若松屋は洪水による被害が少なかったに違いない。おそらく、何らかの縁で、佐吉兄妹は若松屋に一時的に世話になっていたものとみられるが、それは、若松屋の跡継ぎにという思惑のものではないと考えられる。

若松屋では、跡とりが長く無かったということであるが、全く子供が無かったとは考えられない。平位家の墓は、奥から古い順番に並んでいる。八代目の墓のすぐ前では、女性の墓を一つ置いてその前の位置に二つの小さな子供の墓（年号：文政5年1822、文政11年1828）がある。これらは恐らく夭折した

八代目の子供達ではないだろうか。その時八代目はそれぞれ29歳、35歳である。つまり八代目はずっと子供に恵まれなかったのではなく、早くに亡くなった男子を得ていた。成人して九代目を名乗ったのが、天保3年（1832）に生まれた子だったのである。若松屋では当主の年齢からしても、当時、わざわざ貧家の子供を跡とりの可能性のあるものとして引き取る必要は無く、単に災害時の一時的な保護であったものと考えられる。さらに、「南丹竹田」⁵⁾の佐吉の紹介記事の冒頭には、“竹田上町の日下部滝三の伯父日下部佐吉は…”と書かれている。この記事からすると日下部滝三氏は、佐吉の妹の子ということになる。その人が上町に住んでいた、ということは、佐吉の妹は、この上町の家で暮らしたのではないだろうか。佐吉の両親は貧しかったが、名家日下部の一族であり、竹田には日下部と名乗る人々が多かったのである³⁾。滝三氏が養子で日下部家に入った可能性もあるが、佐吉の妹自身が上町の日下部家に養女あるいは嫁として入ったのではないだろうか。若松屋から亀岡の造り酒屋に入った女性は若松屋自身の娘であると考え方が妥当である。

このような幼時の記憶がどれほど佐吉の中に残っていたかは不明である。伊助は佐吉を連れて2年後（文政5年1822）に、自分の故郷に程近い丹波大新屋に店を構えた⁶⁾。伊助27歳、佐吉7歳のことである。伊助は佐吉の両親や親戚などについてよく知る人ではないので、佐吉は両親や妹について詳しく知らないままに成人したと思われる。

2、少年時代－丹波大新屋

佐吉は、伊助のもとで石工として成人した。伊助が結婚したのは店を持って2年後（伊助29歳、佐吉9歳）のことである³⁾。つまり、竹田を出て後、二人は、渡り職人から店を立ち上げ安定させるまでの一番大変な4年間の苦楽を共にしたのである。

佐吉は、また、大新屋の庄屋である九代目上山孝之進成績（寛政3年1791 10月生）に読み書きを師事した¹⁰⁾。この人は大変有能な人で、万延元年（1860）11月18日に亡くなる¹⁰⁾までに、次のような仕事を残している。

文政11年（1828）代官となり、十分に抜擢され⁶⁾（孝之進38歳、佐吉13歳）、嘉永2年（1849）^{11), 12), 13)}（「丹波氷上郡志」⁶⁾によれば嘉永三年とあるが誤植であろう。「新井村誌」¹⁴⁾では嘉永二年）、領主佐野時行が大坂川口番所御船手奉行に命じられたのに従って、大坂川口勤番となり（孝之進59歳、佐吉34歳）、その任を全うした。さらに安政初年の頃に明らかになった約8000両にも及ぶ領主負債に対し、対策を立て、佐野家総知行3500石の惣支配を命ぜられた上、数年を経ずして負債を皆済した。さらに、文政8年（1825）（孝之進35歳、佐吉10歳）から7年をかけて大新屋の灌漑用の池を整備し、嘉永5年（1852）大新屋長砂川の川底浚渫も行った³⁾。「新井村誌」¹⁴⁾は、このため池について、“本村は地勢の関係上灌漑用水少なく…干ばつに際しては困難を来した。只、大新屋村のみは完全なる用水池（文政八年着工天保二年完の山神上池、山神下池、池田池）があるため、その憂は少ない…”と述べており、その益するところは大きかった。

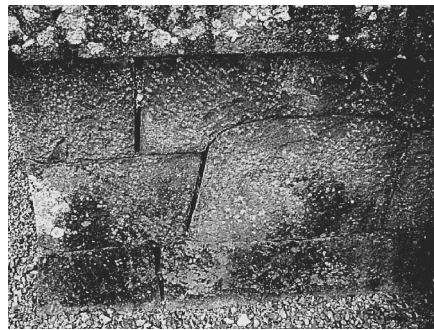
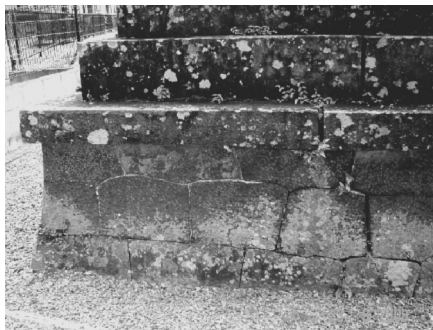
佐吉が上山孝之進に読み書きを習ったのは、恐らく10歳の頃であろうと言われている³⁾。孝之進はこ

の頃から灌漑池の整備という大事業を行っているわけである。これにはもちろん石組みも多くの人手も必要であり、伊助も佐吉もこの事業のために働いたのではないだろうか。実際に山神上・下池は山中にあり、ここに池を作るのは難渋したであろうことが見てとれる。事業が完了するのは天保2年（1831）佐吉16歳の時である。この少年として最も多感な時に、上山孝之進に読み書きを習い、その指揮のもとに働いたことは、一生佐吉の生きる姿勢に影響を与えたに違いない。佐吉は生涯上山孝之進を慕い、彼のために心を込めた石造物を作っている。孝之進の子、上山治郎右衛門有績の手によって残された備忘録（上山家文書）¹⁰⁾の中に、佐吉に関する覚書があり、これが最も重要な佐吉関連資料となっている。治郎右衛門有績は、恐らく年齢的に佐吉に近く、手習いや上記事業の関係から身近に接し、生涯親しくした模様である。

なお、佐吉のこの頃の仕事ぶりは、柏原町天神下の高燈籠に見ることができる。

○柏原新町高燈籠基壇（天保七年1836丙申春三月 御領中内外両宮法燈、世話人頭取田村十三郎、當郡大新屋村石工難波金兵衛）

兵庫県丹波市柏原町柏原新町。金森1988³⁾。



笠のそりが大きい。基壇の仕上げは丁寧で、縁のラインがシャープ。石と石の間はぴったりとしている。文字は力強くかっちりとしている。伊助41歳、佐吉21歳。



佐吉はすでに一人前になっている年齢である。高燈籠には師匠である伊助の名前が記されているが、佐吉は片腕として大きく働いたのに違いない。笠などに佐吉の関与を感じることができるが、それは現在のところ明らかにし得ない。ただ、

燈籠の土台となる基壇は、助手である佐吉の担当と見てよいのではないだろうか。この仕上げは丁寧で美しい。

大新屋は幕府旗本佐野氏の領地であるのに対して、柏原は柏原藩織田家城下町である。後に佐吉作の柏原八幡神社狛犬奉納の折、二代金兵衛は関与せず、柏原の地元の石工が基壇を作っている（柏原八幡神社狛犬の項26頁参照）。これは地元優秀な石工がおれば地元の石工の仕事になるということを示している。逆にいえば、この柏原新町天神下の高燈籠がわざわざ大新屋の伊助に依頼されたのは、伊助・佐吉コンビに対しての信頼ではなかったかと推測される。現在も続く難波家に残る伝承によると、佐吉は大変石を彫るのが好きな人で、休憩の時間も惜しんで伊助に隠れて彫り続けたようである³⁾。その腕は相当に確かであったといえよう。

3、家を出る

「上山家文書」¹⁰⁾に“石工佐吉事 但馬竹田産にて当村金兵衛父金兵衛の弟子にては、器用の才鄙地に可住志に無之。廿有余歳より大和辺、淀、伏見、大坂、諸所にて修業…”とあり、佐吉は、伊助が若い頃歩いたように各地を修行して歩いたことがわかる。「丹波氷上郡志」⁶⁾には、“金兵衛、男子（二世金兵衛）を生むに及んで、佐吉出で、村上氏を称し石工を以て業となす”とある。二代金兵衛が誕生したのが天保8年（1837）（伊助42歳）で、佐吉は22歳であった。佐吉が家を出た理由について、金森氏³⁾は、二代目が生まれたことによって佐吉の居場所がなくなったためとし、佐吉は二代金兵衛への嫉妬の感情が終生大きかったと考えている。しかし、佐吉の心は、“鄙地に可住志に無之”¹⁰⁾で、田舎でほどほどに暮らすのではなく、腕を競う、腕を磨く最高の環境の中にいたかったのである。目指したのは石工職人としては最高の舞台である大坂である。その後の佐吉の仕事ぶりなどから考えて、二代目誕生がちょうどよい機会になった（家を継がなければならない、という縛りから解放された）と考えるのがよいように思われる。佐吉が家を出たのは、佐吉にとって父であり、師匠でもあった伊助が渡りをしてきたのとほぼ同様の年齢である。

また、二代目誕生前年の天保7年（1836）の凶作で、同7年後半から翌8年にかけて大飢饉となった。天保6年7月（1835）の米価に対して、凶作後の8年4月には3倍になっている¹⁵⁾。しかし8年の秋は米が実ったようで、米価は11月にはほぼ収まっている。この11月末に二代目が生まれているのである³⁾。難波家の中で当時最も食事量が必要だったに違いない佐吉にとって、飢饉の経験は、負担を軽くするために幼い子が増えた家を出る理由になりこそすれ、引き留める理由にはならなかったと思われる。

二代目誕生時、伊助は42歳という年齢で、当時としてはほぼ孫に近いといってもよいくらい遅い子であった。伊助の側から考えると、佐吉が店に残ればこの子の成人まで佐吉に面倒をみてもらえ安心であるが、一方、佐吉の将来を考えてやらねばならない訳であり、同時に佐吉の胸の中にあるやみがたいものについて気がついていたのであろう。佐吉が大坂に向かうことは予期されたものであったに違いない。

4、修業時代

佐吉の修業時代については何も残されていない。ただ、狛犬の論文において私は、「上山家文書」¹⁰⁾にある“大和辺、淀、伏見、大坂、諸所”の記事から、佐吉は淀、伏見、大和、大坂のルートをとって最終的に大坂に入ったと考えた²⁾。若者が丹波大新屋から中央に向かうとすると柏原、丹波篠山から亀岡を経て淀に出るのが順当なところである。徒弟修行の明けた若者は、伊助がしたように、道具だけを肩に、渡り修行をすることが多かった³⁾。各地の石屋に行けば、仕事、宿、路銀が得られたのである。佐吉もそのようにして陸路をとって中央を目指したに違いない。後に佐吉の狛犬が奉納されている場所は、佐吉にとって縁のある場所である²⁾ことから、足取りを探ってみよう。

園部の摩気神社に、佐吉狛犬の最後と推測される名作がある。佐吉の狛犬の中でも特異な特徴を持つ

ており^{1), 2)}、この神社には特別な思い入れがあると考えられる。園部は、京・大坂に向かう時、丹波の山並みと別れるほぼ最後の所である。石工として最高のものになりたいと願って中央に出ていく若者の不安まじりの意気込みを、この摩気神社に祈ったとしても不自然ではないだろう。そこで、願をかけたと考えたい。佐吉は生涯“酒を飲まず、妻を迎えず”“専心斯業に傾倒した”¹⁴⁾。これは、彼の性格もあるだろうが、摩気神社で神に願い約束したことでなかったのか。

その後交通の要衝である淀、伏見を経て、大和に入ったと思われる。佐吉の狛犬が残されているのは大和が多く^{1), 2)}、「上山家文書」¹⁰⁾の中で、最初に“大和”があげられていることを思うと、大坂に入る前、大和に最も長く滞在したと考えられる。金森氏³⁾も指摘するように、天保の改革によって株仲間の解散と地方からの人口流入を抑える人返し令が出、当時大坂の石屋に入るには困難があり、相当に力を貯えると同時に、有力者の紹介などが必要だったのではないだろうか。大和でも、機会や“つて”を得るために交通の要の場所にいたと推測される²⁾。大和は当時、神社に石造物奉納のブームが来ていたらしく、さらに大坂との密接な経済交流から大坂の情報を得やすいこと、古い神社仏閣が多く、仏像の最高のものがたくさんあって、勉強するにはうってつけであったことが、大和に長く滞在した理由であろう。

佐吉も30歳を越える頃ようやく大坂に出る時が近づいてくる。八代目若松屋久左衛門が亡くなるのはその頃である（嘉永元年1848、9月17日、佐吉33歳）。金森氏³⁾は、八代目若松屋久左衛門の死の直後に、佐吉は故郷竹田に帰って、恩人の墓石を彫ったと推測している。しかし、佐吉としては、まだ名を確立するに至っていないこの時期に、記憶の定かでない一時的な恩人について、わざわざ墓石を彫りに帰る状況にあったとは考えられない。佐吉はこの人に世話になったことについて良く知らなかった可能性もある。また墓石というものも、死後すぐに作るものでもなく、後になってから作ったと思われる。よって、若松屋の墓石は、もっと後、伊助の病気によって佐吉が故郷に帰った折に作ったものと考ええる。

5、大坂に出る

大新屋で世話になった上山孝之進は、嘉永2年（1849）7月（孝之進59歳、佐吉34歳）大坂御船手奉行となった領主佐野時行の財務担当御用人格として大坂川口に勤務するようになった^{12), 13)}。赴任には息子の治郎右衛門有績を伴った^{12), 13)}。佐吉が大坂に出ることがかなったのには、この孝之進の身元保証があった可能性が考えられる。いずれにしても、大坂での孝之進父子の存在は当時の佐吉にとって非常に大きなものであったに違いない。

ちなみに、嘉永2年（1849）は、約10年前から適塾を開いていた緒方洪庵が、大坂に11月7日、徐痘館を設立した年である¹⁶⁾。

上山孝之進父子が勤務した川口は大坂の海に向かった西の玄関で、大いに賑わった。佐野時行は元治元年（1864）5月大坂川口番所が廃止されるまで、大坂にある幕府の官船の管理運営と海上及び淀川を含む警備、船舶・貨物の監査、外国使節・西国大名の応接などを行う任務下にあった^{11), 12)}が、この間大坂は激動の時代であり、極めて難しい勤めであっただろう。

当時大坂は、諸物産集配の中心地であり、船は遠く中国地方、九州、東北、松前に至るまで往来していた。石造物の生産・流通においても同様に中心地であった。現大阪府下では文化年間から石造狛犬建造が空前のブームとなっており、幕末に向かって周辺各県に波及していった²⁵⁾。奈良県の狛犬の観察から、幕末も終わりに近づくほど、規格的な品も多かったように思われる（磯辺による観察）。大坂にはこうして腕に覚えのある職人が集まっていたわけである。長堀十丁目佐野屋橋南詰は「摂津名所図絵」にも石屋浜として描かれ、石問屋と石工職人集住の街区を形成して賑わっており、同様な街区が西堀笹橋（石屋橋）と東堀九之助橋付近にも形成されていた¹⁶⁾。

佐吉は、“大坂南堀江りう平橋惣入石為方に仮住…”（上山家文書¹⁰⁾）していたか、あるいは南堀江の石屋である小西家に世話になっていた。「新井村誌」¹⁴⁾に“大阪難波五番町石工小西家伝吉の所持せる文殊菩薩像”とあるのは、佐吉が世話になった礼として贈ったものである。上山家文書の記事は佐吉が名をあげてからの主な出来事を書いていると思われるので、石為にいたのは、後の狛犬を盛んに作っていた第二次大坂時代かもしれない。ともあれ、佐吉は大坂の石屋町としてはいくぶん西の庶民的な南堀江にいたわけである。竜平橋は、今は道路になった堀江川にかかっていた橋で、橋の地図¹⁷⁾から判断して、現在の大阪市西区南堀江1丁目堀江公園のあたりにあったと思われる。このあたりは当時の堀江の庶民生活の中心地であった¹⁷⁾。なお、堀江川は昭和20年（1945）の大空襲の後瓦礫でほとんど埋まり、昭和35年（1960）に埋め立てられた¹⁷⁾。

佐吉は腕利きの職人が集まった大坂の石屋で働きながら、名を上げていった。この頃のことと考えられるエピソードは、石の尺八を作ったことである。これは石工間での技比べで作ったものであり、吹き鳴らすことができ、時の孝明天皇に献上され日本一の賛辞を得て、大変な面目を施したとのことである⁶⁾。この言い伝えは、金森氏が調査をしていた昭和54年（1979）の頃もなお石屋の間で有名だった³⁾。ここからわかるのは、佐吉は、削り抜きの技術が格段に優れており、そのことを自分自身もよく認識していたということである。後の彼の作の多くは、細密な彫り、削り抜き、透かしが大きな特徴となっている。

6、佐吉登場—宇陀大師山

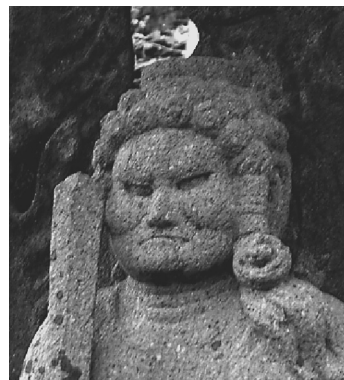
佐吉が我々に明瞭に姿を現すのは、嘉永5年（1852）（佐吉37歳）大和宇陀大師山の中央にある不動明王にその銘を入れた時からである。大新屋を出てから実に15年の歳月が流れている。

大師山の四国八十八箇所巡り石仏群の制作は、八十八箇所石仏88体、弘法大師像15体に加えて、その他の石像、石の五重塔などを含む大プロジェクトである。これらが、山に順番に配置されている。当時このような四国八十八箇所巡りや西国三十三所巡りのミニチュア版とも言える石仏群を配置することが流行した。佐吉とその弟子8人とも10人とも言われるチームは宇陀平井の名家である美登路家に世話になりながら、美登路家所有の山に石仏群を設置することになったのである³⁾。この計画の立案者は美登路家から平井の平田家に養子に入った平田彦八郎である³⁾。

○四国八十八箇所45番岩谷寺不動明王（総供養塔 嘉永五1852壬子九月吉日造建 当村発起平田彦八郎 照信作花押 総世話人18名の名前）

奈良県宇陀市菟田野区平井。金森1988³⁾。

不動明王と石祠。不動明王は穏やかな表情の坐像で幅広な四角い顔。火炎には透かし。腕、指も細部まで丁寧。石祠は大きく力強い。屋根はな



だらか。石祠の室は割り抜かれ四方が開放されている。“総供養塔”の彫りは深く鮮やか。佐吉37歳。

大師山石仏の多くは奉納年代も作者の名も記されていない。その中で佐吉の銘である“照信”が記されているものは特別なものである。その第一が、山の中央に位置する45番岩谷寺不動明王である。文字も佐吉の文字そのままに、深く力の漲ったものである。弟子による石仏は作り始められていたであろうが、佐吉は山のシンボルとなる八十八箇所の中央45番を早期に作ったのである。佐吉による像の顔は面長であることが特徴になるが、この不動明王は四角い顔で穏やかである。不動明王像の多くは怒りの表情をしているが、この45番に似た表情の木造不動明王が、大師山からも遠くない長谷寺にある²⁰⁾。

○S1 平井八王子神社狛犬（嘉永五1852子■歳九月二日建、無銘・伝承、阿：心願成就、吽：願主平田彦八郎）

奈良県宇陀市菟田野区平井。金森1988³⁾、奈良文化財同好会1999¹⁹⁾、藤倉2000²¹⁾、磯辺2007^{1), 2)}。

先の不動明王とほぼ同時である。狛犬第I期。四国八十八箇所巡りを発願した平田彦八郎の心願成就を願ったのものであり（心の中では佐吉自身の心願でもある）、佐吉の銘はまだない。狛犬の形がまだ定型的でないことから、修業時代も含めた佐吉自身の最初の狛犬であろうと考える。八王子神社は平田彦八郎の住む平井の鎮守である。

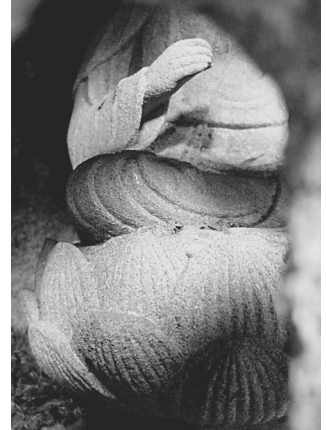
○四国八十八箇所19番立江寺地藏尊（嘉永六1853癸丑四月立之 本尊坐像之地蔵尊 御身躰五寸三步 照信作花押、施主但馬朝来郡竹田町住石工大本佐吉照信花押、世話人当村中 発起平田彦八郎施主7名）奈良県宇陀市菟田野区平井。金森1988³⁾。

地藏は石祠とは異なって和泉砂岩。五寸三步の精密そのものの地藏。佐吉に典型的な面長の、きりりと引き結んだ口元の端正な顔。元来右手には銀の錫杖を持っていたが、今は失われて無い²²⁾。石祠の屋



根は大きく張って、室は1石を刳り抜いて作られている。先の45番の室とは異なり四方に壁があって、前の壁は透かしの格子で開かない扉とな

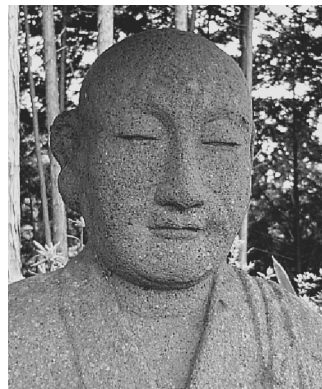
っている。作りは精密で、屋根、室、台座の隙間はぴったりである。“十九番”の彫りは深い。佐吉38歳。



佐吉は単に石像を彫った石工としてだけではなく、奉納者としても名を連ねている。ここで“竹田町住”となっているのは、奉納者として住所をとりあえず記したのである（詳しくは磯辺²⁾を参照されたい）。石祠の室は箱状で、精密に屋根と組み合わされており、その中に5寸3歩の石仏が納められている。石仏に用いた和泉砂岩は細かな彫りの可能な最上質の石で、おそらく45番で得た謝金を投じて和泉からわざわざ取り寄せたのであろう。きわめて細密な彫りである。さらに、銀製の錫杖を持っていたのである²²⁾。この地蔵尊は大きな驚きとともに迎えられたであろう。宇陀は菓の産地であり、大坂とは経済上のつながりが大きく、往来は盛んであった。この像のうわさは大坂にすぐに伝えられ、ニュースになったに違いない。

○四国八十八箇所弘法大師像（15体中の1つだけに嘉永六年1853という年号が記されている）

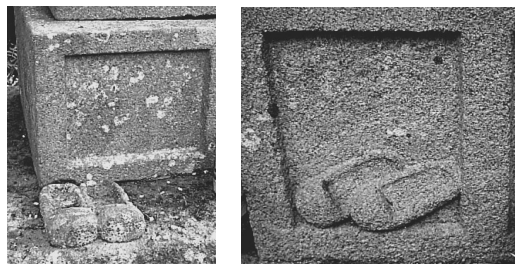
奈良県宇陀市菟田野区平井。 金森1988³⁾。



いずれも弘法大師坐像の定型であり特別な装飾はない。どっしりとした坐像である。口元を引き結んだ穏やかだが意志的な顔。

基壇正面に靴が描かれる場合と、外に出て並べられている場合とがある。佐吉38歳。

15体全てが同一人物による作であり、金森氏が推察するように、佐吉の作であることは確実である。リアルな人物像である。そのやや面長な顔、ぐっと引き締まった口元はいずれも佐吉が作る人型像の共通した特徴である。凝り性であったと思われる佐吉としては、定型なので凝りようが無いのだが、靴に工夫をこらしたのと、いくぶん表情に違いがある。



○S 2 丹生川上神社（中社）狛犬（嘉永六1853癸丑年 十一月吉日、菟田郡平井村二而作之 但州朝来郡竹田町産石工照信作花押、阿：世話人五味九兵衛）

奈良県吉野郡東吉野村小。奈良文化財同好会1999¹⁹⁾、藤倉2000²¹⁾、磯辺2007^{1), 2)}。

佐吉38歳。大師山プロジェクト中頃の作である。この年の夏、降雨が少なく、多くの地方で飢饉となった。この狛犬は、降雨を願って水の神である丹生川上社（中社）に奉納されたと考えられる²⁾。ここから狛犬第Ⅱ期。

金森氏³⁾は、大師山での佐吉の仕事を少ないと感じ、佐吉は自分の仏に自信を失っていたと推測している。しかし、金森氏の調査の後に多くの佐吉狛犬が発見されており、この丹生川上神社の狛犬もその中の1つである。

○S 3 神楽岡神社狛犬（嘉永七年1854甲寅歳 4月吉日、但州竹田産作師照信花押、阿：大坂道修町近江屋彦兵卫、吽：大坂北濱寺丁目近江屋政七）

奈良県宇陀市大宇陀区上新。金森1988³⁾、奈良文化財同好会1999¹⁹⁾、藤倉2000²¹⁾、磯辺2007^{1), 2)}。

ほぼ佐吉風を確立。赤石。大坂道修町の薬種問屋と思われる人物の寄進。佐吉39歳。

この狛犬寄進は飢饉に際して道修町商人による支援があったことを示唆している²⁾。金森氏³⁾は、飢饉に際しチームを一時的に解散して、佐吉は丹波に帰り青垣町大燈寺の亡くなった寛海和尚のための聖観音を彫ったと考えている。聖観音にある日付が嘉永6年12月18日であることによる。しかし、これは和尚の亡くなった日付である。この場合も、和尚が亡くなってすぐにそのための観音を作ったとは考えられない。佐吉が後に他の理由で丹波にいる時に、それを知って依頼したものと考えるのが自然である。さらに、佐吉は11月に丹生川上神社狛犬を、翌年4月に神楽岡神社狛犬を奉納しているのので、この間に青垣町で観音を作ることは困難であると思われる。

また弘法大師15体を全部彫っていること、力の限りをつくした45番と19番、3対の狛犬、その他多数の石仏、またリーダーとしての全体の仕事の取りまとめ、弟子の指導など多くの仕事があり、佐吉は力強く働いていたと考えられる。石仏の奉納者の住所が非常に広範囲で、現宇陀市一円はもとより、吉野郡吉野山、東吉野村、橿原市雲梯、磯城郡笠間にもまで及んでいる²²⁾ことは、この飢饉に際して寄進集めの範囲が広がったことを示しているのではないだろうか。飢饉時に一時的に解散すると再び集まることは不可能であり、この事業が途中で頓挫することは目に見えていた。佐吉チームのみんなも、村の人

も、何が何でも完成させるという意気込みで纏まっていったと考えられる。このことの詳細については大師山石仏群全体の検討を待つことにし、ここでは深く触れないこととする。

飢饉で苦しい中、嘉永7年（1854）3月に日米和親条約が締結された。一方、石仏作りのゴールが見えてきていた頃、世話になっていた美登路家当主忠治郎が亡くなった（嘉永7年4月）³⁾。



○大師山道標（奉四国八十八ヶ所霊場 すくうた左古市場道 すく大師山 いせ道 嘉永七1854甲寅六月）

奈良県宇陀市菟田野区平井。金森1988³⁾。

平井平田家横の道の傍に立っている道標。銘は無いが文字は明らかに佐吉のもの。奉の縦：24、横最大幅：27.5、深さ：6.5cm。



文字は力強く佐吉（39歳）の力が溢れている。約3年のチーム合宿による事業の完成である。飢饉にも見舞われながらやっとの思いで出来上がったに違いない。チームはこれで解散したが、佐吉はここに留まった。それは宇太水分神社に狛犬と永世燈を奉納するためである。



7、大師山後の大宇陀時代

宇陀で佐吉は様々な石造物を作っている。

○S 4 宇太水分神社狛犬（嘉永七1854甲寅歳九月旦、作師照信花押、世話人堀山権作・施主多数の名前）
奈良県宇陀市菟田野区古市場。金森1988³⁾、奈良文化財同好会1999¹⁹⁾、藤倉2000²¹⁾、磯辺2007^{1), 2)}。

施主は非常に多数にのぼっている。世話人堀山権作は町の有力者らしく、大師山45番岩谷寺（総供養塔）にも名前がある。力強い狛犬。佐吉39歳。

○宇太水分神社永世燈（右：嘉永七1854甲寅歳九月旦、左：駒狛施主中）

奈良県宇陀市菟田野区古市場。金森1988³⁾。

1対。銘はないが金森氏同定。本殿正面。笠のそりはなだらかで、先はそり上がっている。割り抜いた猫足の台。“永世燈”は明らかに佐吉の文字で彫りも鮮やかである（写真次頁）。佐吉39歳。

狛犬と同時に狛犬施主一同からの永世燈寄進である。笠も土台も相当に力を入れて作っている。隅々の始末に丁寧な仕事ぶりが伺え、並んでいる他の常夜燈とは全く異なるできばえである。佐吉の永世燈は、



笠の上面のカーブが独特である。他の石灯籠の場合、笠は帽子のように中央部が膨らんでいる（神楽岡神社常夜燈の項15頁参照）ものだが、この永世燈ではなだらかにカーブし横に伸びている。これは石仏石祠の屋根のカーブに近い。佐吉が作ったことが明らかな石灯籠はこれが最初なので、以前からこのような形の笠を作っていたのか、この永世燈での新たな試みかは不明である。この特徴は以後継承される。

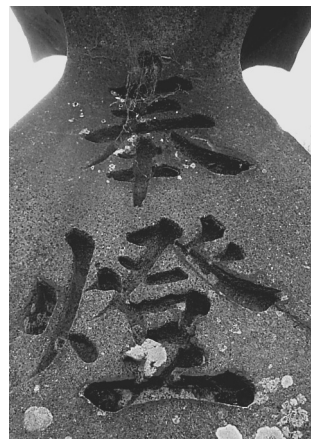
狛犬、永世燈合わせて神楽岡神社狛犬から約5か月後である。神楽岡が済んだ後すぐに、大師山の総仕上げの仕事にあたりながら、佐吉はこれらを始めたと考えてよい。しかし、その制作中6月15日に大地震があり、その後も夏中揺れ続けた²²⁾。それにも関わらず美しい仕上がりで9月に奉納できた。そして暮れの11月に、さらに大きな地震が襲った。

大坂では、同年9月18日ロシア船ディアナ号が天保山沖に投錨。2日前の16日大阪町奉行および御船手に大坂城代より訓令があり、川口は嚴重警備に入った。後に佐野時行は行き届いた報告書を纏めている¹⁶⁾。同船は10月3日大坂を離れ下田に向かった。しかし、ほっとする間もなく11月4日と5日に大地震発生、ディアナ号は下田で大破、5日、津波発生し、大坂は津波による被害甚大。特に船が押し寄せ家屋を押し倒した。この時の被害調査はよく行われ、施行もよく行われた¹⁶⁾。御船手奉行および上山孝之進父子の毎日は息つく間もない状況である。安政2年に明らかにされた8000両に及ぶ佐野家の借金は、参勤交代の西国大名や琉球使の応接（嘉永3年10月、佐野時行・上山父子大坂着任の翌年）に物入りだったとのことであるが^{12), 13)} この地震被害救済と復興によっても急増したのではないだろうか。

同時期に丹波大新屋では金兵衛の手になる高燈籠が上山孝之進と氏子中によって奉納された。

<金兵衛（推定伊助）作>

- ・新井神社参道入り口高灯籠（嘉永七年1854甲寅九月 向かって右：大坂御船手勤番中 上山孝之進藤原成績 左：当村氏子中 当村石工金兵衛）
兵庫県丹波市柏原町大新屋。金森1988³⁾。



笠の形が、佐吉のものとは異なる。笠の先が、以前の伊助・佐吉共同の柏原新町の高灯籠程伸びない。基壇は、表面と縁の仕上げ共に粗い。伊助59歳、二代金兵衛18歳、上山孝之進64歳。

作者の金兵衛は二代目であるという難波家の話から、金森氏は二代目の作としている³⁾。しかし、“奉燈”の文字は後に出てくる二代目の文字ではない。この文字は伊助かあるいは上山孝之進と考えられるが、孝之進のような気がする。それは加茂神社（18頁）の伊助のものと推定する“奉獻”の文字と異なっているからである。この“奉燈”は、佐吉の文字と似ていると同時に、きちんとしながら、まったりとしている。佐吉の書の師であり、温厚で有能な上山孝之進の文字にふさわしい。

この高灯籠はほぼ伊助の作と考えても良いのではないだろうか。二代目が手がけたとしてもまだまだ健在の伊助の手が相当に入っていると考えるとよい。しかし、高灯籠の基壇は若い二代金兵衛のものに違いない。この基壇（二代金兵衛18歳）と以前の柏原新町の高灯籠基壇（佐吉21歳）とを比べると、両者の技量の違いが明瞭である。4年後、二代金兵衛（22歳）が作ったことが確実な北山稻荷狐基壇（24頁）でも、佐吉21歳に及ばない。

佐吉の方は、さらに宇陀に留まる。宇太水分神社に力のこもった永世燈と狛犬を奉納（9月）した後、次の大師山入り口永世燈まで5ヶ月を要している。この永世燈は比較的気軽に作っているようで、5ヶ月を要するとは思えない。この間大きな地震に襲われ、その收拾などからしばらく仕事ができなかった可能性もある。また時期を決定できない作の中のいくつかがこの間に造られている可能性も大きい。ともあれ、佐吉は、地震のことなどから、落ち着くまでしばらくここに留まることにし、町の人々と交流を深めていったのであろう。宇陀の風土、景色は育った大新屋に良く似ている。翌安政2年（1855）には落ち着いたらしく、比較的気軽なものを次々と作っている。佐吉の一生の中で最も穏やかだったように見える時である。

○大師山入り口永世燈（安政二1855年
乙卯二月旦：石工村上佐吉）

奈良県宇陀市菟田野区平井。

金森1988³⁾の年表にのみ記述がある。

1対。永世燈は手慣れた感じである。
傘のそりは佐吉風になだらか。佐吉40歳。

気軽に作っている。“照信花押”では
なく“村上佐吉”とあって花押が無いの
は珍しく、これも気軽な気持ちの表れだ
ろうか。



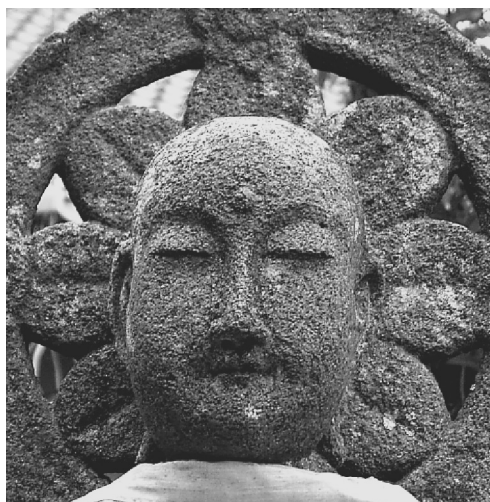
○法正寺禅曹洞宗地藏（海會寶塔 ■時安政二1855乙卯歳四月如嘉日 禅光山十七世 天秀比丘敬建為
施主 善男善女等世話人秋葉講中 但州竹田産 作師照信花押）



奈良県宇陀市大宇陀区上新
金森1988³⁾。

地藏立像。典型的な佐吉風
の、面長で口元の引き締まっ
た顔。光輪は透かし彫り。法
正寺は神楽岡神社のすぐ下。
佐吉40歳。

リアルで生身の人物像に見
える。



○宇陀水分神社鳥居近くの常夜燈（安政二1855乙卯歳
五月吉日 當村中 世話人堀山権作）新

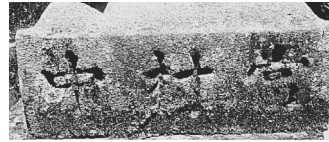
奈良県宇陀市菟田野区古市場。

1基。神社正面の鳥居に最も近い燈（本殿に向かっ
て左側）。“常夜燈”“當村中”の文字から、佐吉作と
同定。笠の上面なだらか。石の目は粗い。佐吉40歳。

全体に気軽な作りであるが、前の宇太水分神社永世
燈と大師山入り口永世燈と同様の笠である。この向か
い側にある1基の常夜燈（水分社 堀山氏 享和二



1802戌年九月■一日 松山町石野■兵衛清義作)の笠が当時としては珍しく上面がなだらかである。宇陀地方で暮らすうちにこの常夜燈が目にとまり、当神社本殿前の永世燈を作るにあたって参考にした可能性もある。次の久米御縣神社狛犬と神楽岡神社常夜燈まで6ヶ月。



○S 5 久米御縣神社狛犬 (安政二1855乙卯歳十一月吉祥日、作師照信花押、阿吽とも：村中安全、氏子中)

奈良県橿原市久米町。奈良文化財同好会1999¹⁹⁾、磯辺2007^{1), 2)}。

首をかしげたかわいい狛犬である。佐吉の狛犬の多くは拝観する側にせり出してくるように体を捻っている。この狛犬は、それに加えて奥側の前脚に重心を置くという複雑な体勢をとっており、首を傾げる様子はそのことから派生している。この複雑な体勢は、恐らく地震に対応できるようにと佐吉が考えたのではないだろうか。

一般に狛犬は前脚を破損することが多い。そのような狛犬の地元の人のお話では地震によって脚を折ったということである。この時までの佐吉の狛犬で破損したものは無いが、それでも用心し、なるべく重心を失わないようにしながら自然にこちらを向かせる工夫をこらしたものと考えられる。石は赤石。

○神楽岡神社常夜燈 (奉燈 安政二1855乙卯歳十一月旦) 新

奈良県宇陀市大宇陀区上新。



1 基。神楽岡神社境内に一系列に並ぶ常夜燈の中で、奥側の列の中央、奥から5番目(上図矢印)。文字によって佐吉と同定。笠のそりはなだらか(下図中央)。全体に気軽な作り。

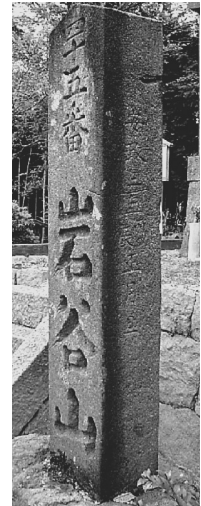
地元の人達による奉納。これも佐吉としては気軽に作っているが、並んでいるものの中では、全体に端正な姿である。笠のそりが、横に並んでいるものと異なることがわかる。よく似た笠の形態を持っているのが奥にあるが、これは大正7年（1918）10月に作られたもので、恐らく佐吉のものを手本にしたのであろう。

○大師山四国八十八箇所第45番岩屋寺不動明王前の標識・四十五番岩谷山（安政三年1856丙辰正月旦）新

奈良県宇陀市菟田野区平井。

佐吉の大師山代表作である中央の岩谷寺不動明王の前に立つ標識。文字によって佐吉作と同定。佐吉41歳。

大師山プロジェクトが終了してから、後にこの標識を加えているわけである。



<以下はこの地方にある制作時期不明のものである。>

○大師山四国八十八箇所第一番横の地蔵（照信作）

奈良県宇陀市菟田野区平井。金森1988³⁾。

典型的な佐吉風。細面で、口元きりりとしながらも柔和な表情。左足親指が反っている。

八十八箇所石仏そのものではなく、追加のものであり、法正寺地蔵とも良く似た雰囲気なので、八十八箇所完成後と考える。法正寺地蔵よりにこやか。



○徳源寺布袋（照信花押）

奈良県宇陀市大宇陀区岩室。金森1988³⁾。



顔は丸く、目と眉は和んでいるが、口はやはり引き結んでいる。赤石。

丸い形から、佐吉の穏やかな気持ちが汲み取れる。布袋はにこやかであるが、口元はぐっと引き締まっている。全体にきちんと作られている感じがあり、佐吉作仏像の範疇の中にある。

○美登路家善光寺三尊

美登路家所蔵。 金森1988³⁾。

金森氏³⁾の本の中にある写真のみ。世話になった美登路家への礼として作られた。写真でしかわからないが、それでも美しい。他に伝承として、お風呂に入れてもらっていたという宇陀大神の前田家にも石像が礼として残されたようである³⁾。

○大師山四国八十八箇所番外長谷寺式観音

奈良県宇陀市菟田野区平井。金森1988³⁾。

未完。立像。年月・銘共になし。

宇陀での最後となる未完の長谷寺式観音である。製作途中で年月は入っていない。

金森氏³⁾は、後に佐吉が行方不明になってから、長谷寺との関係が認められる（後述：14、その後）ことから、この未完の作を最後と考え、最終的に佐吉は宇陀に帰ってきたと推測している。また佐吉は細かく彫り過ぎ



ぎて仏を彫れていないが、この作では作りきらないところに、仏性があるとして、最後にその境地に至ったと推測している³⁾。

しかし、美登路家分家の富太郎さん（明治41年生）の話によると、“…佐吉さんがこしらえとって、途中で去ってしまったのですわ。だから半作です。途中で去んでしま



ったのは家で病人がでたというのを飛脚が知らせに来たからです。八十八番を彫った後のことだったと思います。帰ってきたらまたやるわといって、半作のまま去ってしまった。…”とのことである³⁾。

この像の雰囲気は、一番横の地藏と同じであり、特別に他と違う境地は感じられない。私は、伝承通り、宇陀にいたこの時期に作っており、故郷から病人の知らせで途中のまま急いで帰ったという方をとる。

他に大師山の中には石の五重の塔（嘉永六年1853丑八月建 吉野■小川材木商人中）もある。この作者についてはよくわからない。また、佐吉であることが確実とは言えないが、その可能性のあるものとして金森氏は宇陀水分神社そばの安楽寺の塔を挙げている³⁾。

一方、この頃金兵衛の作として、加茂神社狛犬がある。

<金兵衛（推定伊助）作>

- ・ 加茂神社狛犬（安政二1855卯歳九月吉日 奉献 阿：鈴木多郎兵衛 世話方甚七 佐七 大新屋石工金兵衛 咩：氏子中 世話方甚七 佐七）
兵庫県丹波市柏原町鴨野。HP「丹波人物史」²³⁾。



力強い狛犬。身にひねりなくほぼ前を向く。頭はわずかにこちらを向く。雌雄無し。角無し。背骨無し。奉：縦6.5、幅6.5、右払い深さ0.4cm。基壇の仕上げ粗い。伊助60歳、二代金兵衛19歳。

この狛犬もどちらの金兵衛か明確ではない。しかし、後に二代目が作った大崎神社狛犬と作風が大きい

く異なっている。二代目の大崎神社狛犬はおとなしい雰囲気と彼の仏像とも通じるものがあるが、この狛犬には力がある。“奉獻”の字体は二代目のもの（北山稲荷、大崎神社参照、24、36頁）に似るが、こちらには横への勢いがあり、狛犬とも通じる。この作者は二代目とは別人、すなわち伊助と考える。親子で似た字体であったわけである。そこでこの狛犬は基本的に伊助のもので、二代目は手伝っていたのであろう。基壇は二代目が作ったと考えられるが、やはり粗い。鴨野は大新屋の隣の地区である。

なお、この“奉”は佐吉最後の狛犬である摩気神社の“奉”と大変よく似ている。

8、帰郷

佐吉が長谷寺式観音を彫っている途中で、この時まで帰ったことのない故郷に帰っているのは余程の急用である。父代わりであり、師匠でもあった伊助の病気で、かなり重いという知らせであったに違いない。一方、帰郷時に佐吉は以下に述べるように恩人の墓と聖観音を作っており、それは故郷で時間があつたということになる。また、次項“9、大坂狛犬時代”で示される大坂での作の制作時期が、伊助の死後早いことから、恩人の墓と聖観音は伊助が亡くなる前と考えられる。そこで伊助の病気は意外にせつぱつまっておらず、伊助重病の知らせは、伊助本人の意志であったと考えたい。伊助が、自分の病が重篤になる前に佐吉を呼んだ理由は、病気が普通でないことを悟った伊助が佐吉に会いたくなったということである。しかし本当の理由は跡取りの二代金兵衛に会わせかけたかとみるべきであろう。二代金兵衛は、大変早熟で10代の初め頃から近隣に名を上げている³⁾。しかし、今まで見てきたように基壇の作りからは、圧倒的な技術を感じさせない。佐吉の若い頃の基壇と比べてかなり見劣りする。

伊助の気持ちを考えると、二代目は40歳を過ぎてからの子供である。当時石工は40歳を過ぎるといつ死んでもおかしくないと言われていた³⁾。同時に片腕でもあった佐吉が家を出たことから考えると、一刻も早く一人前におきかけたのであろう。子もまたよくその親の期待に応えたのであつたが、早すぎる名声には親の陰ながらの支えがあつたと考えられる。しかし、成人する頃から、地方での名声に安住する気配があり、親の目から見て不足があつたと思うべきである。伊助は、幼くして父を失い、子供時代から伊丹の石屋に奉公に出、職人として独り立ちしてからは、しばらく渡りを経験した後、自力で店を開き地盤を築いた³⁾。その腕は確かであり、伊助45歳（天保11年1840）の神池寺の観音はふっくらとして優れた石仏であり³⁾、伊助の可能性が高い³⁾と言われる万松寺の地蔵も力のある地蔵である。

一方、二代目は生まれた時から店と父の名声がある状況で育つた。二人には意識の上でかなりの差があつたと思われる。伊助は佐吉の若い頃と比べる気持ちにもなつただろうし、自分が渡りになって修行して回つた同様な年齢の時のことも思ったに違いない。自分の死後の二代目の先行きを考えて、自分の目の黒いうちに佐吉に会わせておけば、良い刺激をもらい、後々も支えてもらえるのではないかという親心が佐吉を呼ばせたと考えられる。

当時の交通を思えば、それほど重病でないうちに、重病との連絡が行つたのであろう。大急ぎで帰つた佐吉と再会した時、意外に伊助は元気であり、佐吉はしばらく逗留することになつたのではないだろうか。

伊助がどういう心持で呼んだかに拘わらず、ほぼ20年の歳月を経て、老いた伊助と一人前になった佐吉の再会である。しかも、最も苦しかった渡りと店の初めを共有した二人である。これは、妻も子も共有できない苦しかったが若くて自由だった時代の思い出であり、再会したその時に、二人を過去そのままに連れ戻すものである。この二人の間に、父であり師匠である伊助から目をかけられて成人してきた二代金兵衛が入り込めない気分を抱いたとしてもおかしくはない。彼はまだ若く、近隣では名声をほしのままにしており、佐吉と自分の差を実際以上に小さく思っていたに違いない。あるレベル以上では、小さく見える差を乗り越えることがどれほど大変か、越えていない人間にはわからないのである。

一方、佐吉と伊助は昔語りをし、佐吉が幼い頃若松屋で世話になっていたことなども話に出たのであろう。思いがけず時間のできた佐吉は、故郷竹田を訪ね、若松屋にもお礼に行こうと考えたのに違いない。当然、記憶も定かでない父母のこと、もっと幼かった妹のことを確かめたいと思っただけのことである。

竹田では、まず若松屋を訪れ、まだ元気であった八代目の妻女に会って話をし³⁾、亡くなった八代目のために墓石を彫ることを申し出た。また、妹のことや父母のことも聞いたであろう。

○第八代平位久左衛門墓石（嘉永元戊申年九月十七日去、■山太村浅田幾四良子為養子 行年五十五才）
兵庫県朝来市和田山町竹田。金森1988³⁾。



八代目の墓石（矢印）。



明らかに佐吉の文字。彫り深く鮮やか。

八代目以前の墓より格段に立派で、本人の履歴も書き込まれており、十代目までそれに倣っている。墓石から八代目は1794年生の計算になる。

なおこの頃のこととして「南但竹田」⁵⁾に次のような言い伝えが記されている。“…その当時（佐吉が平位家の墓石を彫った時）、竹田一之宮表米神社の神官北垣出雲守は、佐吉の名声を聞いて表米神社前に奉納する狛犬を作ってくれと依頼した。その時佐吉は「自分は制作を拒む者ではないが、自分の彫った狛犬の前を貴方が平気で通れるであろうか、どうかである」といった。神官北垣は良心的に慄然となったのである。…”

表米神社神官北垣出雲守は佐吉と同じ日下部の一族で³⁾、当時戸籍担当の仕事もしていた⁵⁾。金森氏³⁾

の考えでは、佐吉はこの時日下部の一族であるという意識を強くし、血の誇りを強く持つに至ると同時に、誇りを傷つけられ、見下す神官を憎み必要以上にかたくなに断った。しかし、上の佐吉の言葉はあいまいなものではなく、何かもっとはっきりとした理由がありそうである。考えられるのは、佐吉の両親が亡くなった時のことではなかろうか。洪水と疫病で亡くなったとすると、困難の最中に両親を助け、孤児になった佐吉兄妹を引き取るのは、親類の努めであろう。多くの人が多かれ少なかれ洪水の被害を受けた中で、表米神社は山の中腹にあって町を見下ろしており、洪水とは縁がない。しかし結局、町の有力者であった平位家が二人の子供をしばらく引き取るようになった。両親の最後や、当時の北垣神官の態度を、平位家の妻女や妹の嫁ぎ先などで聞き、この神官の申し入れに驚いたに違いない。なお、後になって表米神社に狛犬が奉納されたのは、明治27年（1894）戦没軍人のためである。

不快な気持ちを抱えて佐吉は丹波大新屋に帰る。追うように、大燈寺から聖観音の依頼が来る。佐吉が帰っていることがうわさになり、依頼する運びになったと考えられる。安政3年（1856）中のことである。

○大燈寺聖観音（嘉永六年癸丑十二月十八日 世寿八十一乗、一行あってから、寛齡拜刻、反対側読めず）
（金森³）によれば、世寿八十一乗 三住花園南海蔵首 来時無伴 去時無伴 去々来々 日月無伴
作師但州竹田産照信花押）
兵庫県丹波市青垣町稲土。金森1988³）。



装飾多く細部にまで細かい彫がされている。石は白っぽく硬い。面長で口元をきちんと結んだ形は佐吉のいつもの形である。しかし、むっつりとして厳しい目である。

年号は寛海和尚の亡くなった日付である。金森氏³は、石はもろく粉を吹いているように表現しているが、粉を吹いているわけではなく、硬い滑らかな石である。確かに佐吉風であるが、聖観音は厳し

い顔つきで慥然としているといってもよい。佐吉の仏像は口元をきちんと結んでいるのが普通であるが、穏やかな表情のものが多く、このように慥然としたものは他にない。竹田での不快な気持ちが収まらないままに制作し、厳しい表情の聖観音ができたのであろう。

年末になって伊助は亡くなった（安政3年1856 12月15日、伊助61歳³⁾）。伊助が亡くなると佐吉にとって大新屋に留まる理由は無い。

9、大坂狛犬時代

次の上山治郎右衛門藤原有績依頼による上山家所蔵の狐は大新屋で作られたとされている³⁾が、上山孝之進父子は大坂勤務中である。またこの狐には但馬での不快さの影は微塵も無く、気持ちの切り替えがある。そこで、私は狐を大坂で作ったと考える。

丹波からの帰りに佐吉は久しぶりに大坂に立ち寄ったのである。恐らく宇陀に行って以来会っていない孝之進父子への挨拶と石屋や石工仲間への挨拶に立ち寄ったのではないだろうか。

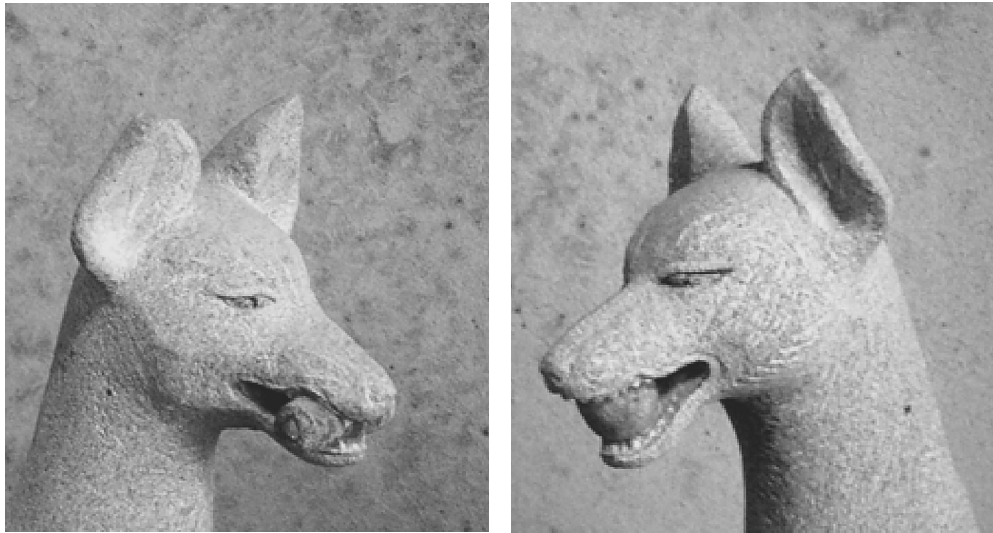
○上山家狐（安政丁巳1857四月吉日 作人照信花押、上山治郎右衛門藤原有績）

兵庫県丹波市柏原町大新屋。金森1988³⁾。



端正な狐である。

これは息子の治郎右衛門有績からの依頼である。支払い記録が「上山家文書」¹⁰⁾の中にある。大変保存が良く、室外に置かれていた形跡はない。現在大新屋の元の上山家に保存されているが、元来は大坂にあったと思われる。孝之進は、大変信心深い人で、大新屋の家の敷地内に稲荷やその他を本格的に祀っていた³⁾。当然大坂で厳しい勤務に就くに当たって、大坂の役宅にも室内に神棚を祀ったに違いない。



狐の全身にノミ跡が毛流れとして残されている。佐吉42歳。

この時期上山孝之進は、大坂で佐野家の8000両に及ぶ借金の返済算段の最中であろう。また前年7月（佐吉は丹波に帰っていた頃かもしれない）幕府は大坂の安治、木津両川口に台場を築いており¹²⁾、多忙である。大坂勤務に同行し父を助けていた息子の有績は、父を案じ、仕事が順調に行くことを願って、久しぶりに会った佐吉に狐を依頼したのではないだろうか。宇陀での仕事ぶりは大坂にも聞こえていて、有績は良く知っていたのであろう。佐吉は、他ならぬ上山親子のためであり、そのまま大坂に留まって一心に狐を彫ったのに違はなく、気品にあふれる美しい狐である。この狐は、上山親子の気持ちの上では良く二人を守ったのではないだろうか。佐野家の借金は消え、その後おつりが来るところにまで回復するのである⁶⁾。

同様な頃に、二代金兵衛にも狐が依頼されている（上山家文書¹⁰⁾）。これは大新屋にも狐を祀ろうという考えであろう。文書の記録によれば佐吉の狐の代金2両に対し、金兵衛の狐は1両であった。大きさ不明であるが、屋外の稲荷に祀る狐であるなら、佐吉の狐とそれほど変わらず、この料金の差が、二人の石工に対する上山家の評価であると言っても良い。

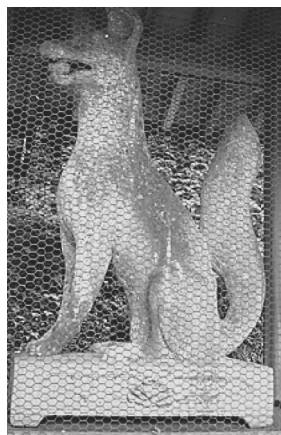
○S 6 興留・素盞鳴神社狛犬（安政四年1857丁巳九月日、作師照信花押、吽：龍田石工九兵衛）

奈良県生駒郡斑鳩町興留東。奈良文化財同好会1999¹⁹⁾、藤倉2000²¹⁾、磯辺2007^{1), 2)}。

9月に名作興留・素盞鳴神社狛犬を奉納している。佐吉42歳。狛犬第Ⅱ期の頂点。若さと勢いのある非常に優れた石像である。佐吉が大坂に帰ったことを知った素盞鳴神社から狛犬が依頼されたのである。斑鳩の地は、大和でも大坂に近く、こうした話はすぐに伝わることができる。基壇は地元の石工が作っているの、佐吉は大坂で狛犬を彫り、送ったことになる。

上山家狐とこの狛犬から考えて、佐吉の心の底にあったかもしれない故郷や父母への思いは、今回の故郷訪問で知ったことや、伊助の死などから、ふっきれたに違いない。

○北山稻荷狐（安政五年1858八月作之 氏子中 向かって右：大新屋石工金兵衛藤原義継 左：但馬朝来郡竹田産石工源照信花押 田口金次昌榮）
兵庫県丹波市柏原町北山。金森1988³⁾。



上山家狐と良く似ている。台座の文字は佐吉のものではない。基壇の作りは粗い。狐の州浜に佐吉の号。台座に金兵衛の名。佐吉43歳。二代金兵衛22歳。

この狐は、興留・素盞鳴神社狛犬の後なので、大坂で作ったものである。佐吉は狐だけを彫り、台座は地元の二代金兵衛が作った。金兵衛作の基壇は粗い作りである。金森氏³⁾は地元で二人が作っていて、特に佐吉側の嫉妬



の感情を元に二人の間に確執があるように考えている。しかし、佐吉は大坂にいたので、台座を二代金兵衛に任せることになったのは自然なことである。北山は大新屋のすぐそばである。台座の文字は金兵衛のものであろう。この文字は二代目が後に作った大崎神社狛犬の台座の文字と同一人物によるもので、佐吉の文字の力強さとは違っておとなしい文字である。難波家は伊助以来代々趣味人で音曲を嗜んだ³⁾。佐吉とは全く性格の異なる人々である。父である伊助の文字と大変似通っているが、よりおとなしい。

佐吉は上山家狐以降ますます前を向いて精進していると見ることができる。とらわれがあるとしたら、恐らく二代目の側である。しかし、二代目は、父の心配をよそに、自分の力量を測る競争相手がおらず、それほど大きな不満もなく過ごしていた可能性がある。佐吉とも特に深い親交を結んだわけではなかったのだろう。

○明日香道標（安政五1858戊午年八月吉日 右ちはら ごせ こんかうさん 道、左おかてら はせと 心のミ祢 いせ 道、聖阿上人他2名の上人名、14名の戒名、服部甚兵衛建立 基石称念寺寄進）
奈良県高市郡明日香村越。金森1988³⁾。
金森氏同定。道を示す道標であるが、戒名が刻まれている。



文字の彫りは深く鮮やか。道標の上部には屋根があり、四面に仏像が彫られている。佐吉の銘は無いが文字から確実である。屋根のそりも上にある仏の顔も佐吉風である。仏は小さいが細密な彫りで、その顔は柔和。宇陀の時代に比べても進化している。特に女性的な仏において明瞭。佐吉43歳。

北山稲荷と同時期である。その美しさ、彫りの鮮やかさ、佐吉は心を込めて彫っている。観音は笑みをもって高貴さを漂わせている。戒名の人々、あるいは依頼者は飛鳥の親しい人々なのであろう。しかし、興留・素盞鳴神社から11ヶ月というのは、狐と道標には長過ぎる。この時期から考えると、長崎に上陸した後急激に伝播して、7、8月大坂で大流行となったコレラ²⁴⁾と関係があるかもしれない。また道標の戒名にもそのような理由があるかもしれない。和泉砂岩でできているので、足元が傷みかかっている。将来を考えると一層の保護が必要と思われる。

佐吉はこれ以降、狛犬に邁進する。工夫に工夫をこらした。この頃上山父子から柏原・八幡神社に狛犬を奉納することについて非公式な打診があったのではないだろうか。

- S 7 藤森・十二支社狛犬（台座のみ：安政五1858戊午年十二月吉旦、元の狛犬が無いために銘不明、阿：氏子中、酒屋茂八・源七・重兵衛、田原本 吉邑茂吉・友吉・忠吉、八木善三郎、吽：氏子中、村中安全）

奈良県大和高田市藤森。磯辺2007^{1), 2)}。

狛犬第Ⅱ期の最後だが、Ⅲ期への移行期とも見える。佐吉43歳。

以下第Ⅲ期。第Ⅲ期は、その最後で頂点をなす柏原・八幡神社狛犬に向けての試行錯誤の道筋である。飛鳥道標から永原・御霊神社まで各4～6ヶ月の間を置いて次々と狛犬を作っていく。詳しくは磯辺^{1), 2)}を参照されたい。

- S 8 伴堂・杵築神社狛犬（安政六年1859己未四月吉日、作師照信花押、吽：大坂住石工佐吉）

奈良県磯城郡三宅町伴堂。金森1988³⁾、奈良文化財同好会1999¹⁹⁾、藤倉2000²¹⁾、磯辺2007^{1), 2)}。

新しい狛犬を模索中。佐吉44歳。

- S 9 下永・八幡神社狛犬（安政六年1859己未九月、作師照信花押、阿：岡西伊兵衛、岡西伊佐工門、長尾村椿本八重、吽：氏子中、大坂住石工佐吉）

奈良県磯城郡川西町下永。金森1988³⁾、奈良文化財同好会1999¹⁹⁾、藤倉2000²¹⁾、磯辺2007^{1), 2)}。

ここに至って新しい佐吉の狛犬を作り出す。佐吉44歳。

- S 10 永原・御霊神社狛犬（阿：安政七■申年1860閏三月吉日、吽：万延元年1860庚申三月■日、照信作花押、阿：惣氏子、寄進永原村・福知堂村27人の名前+1、吽：氏子、九條邑、世話人4名の名前）奈良県天理市永原町。金森1988³⁾、奈良文化財同好会1999¹⁹⁾、藤倉2000²¹⁾、磯辺2007^{1), 2)}。

この頃物価高騰¹⁶⁾。狛犬の作りがやや簡略化した²⁾ 割には下永・八幡から6ヶ月とやや長くかかっているのは、そのためか。なお、この年（安政七年＝万延元年）、3月3日桜田門外の変、秋丹波は大凶作であった¹⁵⁾。佐吉45歳。

- S 11 柏原・八幡神社狛犬（文久元年1861辛酉五月、作師村上源照信花押、石匠照信花押、阿：施主上山孝之進藤原成績、当所石工仁兵卫、吽：施主田口金次昌榮、世話人當所播磨屋徳兵衛、越後屋定助）兵庫県丹波市柏原町柏原。金森1988³⁾、奈良文化財同好会1999¹⁹⁾、藤倉2000²¹⁾、小寺2003²⁵⁾、磯辺2007^{1), 2)}。

他に無い狛犬を完成。尾は流れる。基壇の仕上げは丁寧である。佐吉46歳。

柏原・八幡はその前の狛犬から11ヶ月と万を持しての制作である。奉納に先立つこと約3カ月の万延2年（1861）2月18日狛犬1対代として10両が佐吉に手渡された（上山家文書¹⁰⁾）。金森氏³⁾はこの日付を万延元年で、この代金を手付けとしている。しかし、これは2年酉年であることが文書から明らかで、この時狛犬は佐吉の手を離れ、柏原に運ばれて行ったのである。ここまでで、前の狛犬から8ヶ月、長くかかったのは、佐吉が力を入れたのに加えて前年来の凶作も関係があるかもしれない。基壇作りが地元の石工仁兵衛の手によって行われた。良い石工である。盛大な狛犬奉納を上山孝之進（万延元年

1860、11月8日没、70歳) は見るができなかったが、2月に引き渡しが行われたのなら、狛犬の概ねの仕上がりを見ていたかもしれない。

10、狛犬第Ⅳ期と病気

狛犬第Ⅲ期の最後の柏原・八幡までは、佐吉のひたすらな意気込みが感じられるのに対して、次の第Ⅳ期はそうではない。つまり、第Ⅳ期の狛犬では尾の渦に工夫があるものの、小さな工夫でしかなく、狛犬に力を入れている感じがしない。また岸和田市兵主神社以外の斑鳩町付近では、台座・基壇を地元の石工にまかせ、狛犬だけを作っている。しかし制作間隔は決して短くはない。

佐吉は、柏原・八幡で満足して狛犬に力の限りをつくすことを止めたのだろうか。佐吉のこれまでの仕事ぶりからすると、名声を得た中でほどほどの仕事に安住していくようには思えない。当時佐吉に何があったかを考えると、可能性があるのは、一つは病気であり、一つは他のことに一所懸命であった可能性である。

○S12 沢白山神社狛犬 (文久元1861 十二月、無銘、阿：氏子中)

奈良県北葛城郡広陵町沢。磯辺2007¹⁾、²⁾。

柏原・八幡から7ヶ月。この年、夏にはコレラと麻疹が流行し²⁴⁾、秋10月20日、皇女和宮の行列が江戸に向かって京を発って行った。佐吉46歳。

○S13 兵主神社狛犬 (文久二1862 壬戌歳十一月吉日、台座のみ、「作師照信花押」記録有、阿：氏子中)

大阪府岸和田市西之内町。奈良文化財同好会1999¹⁹⁾ (佐吉狛犬写真・銘の記録)、藤倉2000²¹⁾、小寺2003²⁵⁾、磯辺2007¹⁾、²⁾。

沢白山から11ヶ月。同年8月生麦事件。佐吉47歳。

○S15 阿波神社狛犬 (台座正面の寄進年月破損により不明、作師照信花押、他になし)

奈良県生駒郡斑鳩町阿波。奈良文化財同好会1999¹⁹⁾、磯辺2007¹⁾、²⁾。

時期不明により狛犬番号は次の神岳よりも後だが、神岳に珍しい失敗があることから、阿波を前とする。

○S14 神岳神社狛犬 (文久三年1863 九月、作師照信花押、阿咩とも氏子中)

奈良県生駒郡斑鳩町神南。奈良文化財同好会1999¹⁹⁾、藤倉2000²¹⁾、磯辺2007¹⁾、²⁾。

兵主神社から10ヶ月。佐吉48歳。間に阿波がある。神岳神社の狛犬には、2箇所、他では見られない失敗がある²⁾。第Ⅳ期の中では恐らく神岳神社が最後で、この時に至って病気が手元を狂わずまで進行したと見られる。病気は当時蔓延していた梅毒である。

梅毒は1500年代初頭に日本で最初の記録があるが、江戸期には蔓延して恐るべき状況にあり、しかも当時の日本人がそれを恥じていないことが幕末期に来日したポンペやヘボンによって報告されている²⁶⁾。

職人もこの病気に罹るものが多かったに違いない。佐吉が梅毒に罹っていたことは、療養先の泉州石材商松尾家の後裔松尾弥三郎氏の証言にある³⁾。

病気が治癒したお礼に、佐吉は松尾家の墓石を彫った。

○淡輪西林寺墓石（裏側_妙：安政三辰年十二月十九日、如：安政五午年八月十一日、智：安政五午年五月廿九日）

大阪府泉南郡岬町淡輪。金森1988³⁾。



明日香の道標に似て、深い屋根の下に仏が彫られている。文字も小さいが深い彫で、鮮やかである。世話になった三代目松尾大吉の先代である二代目弥八郎（中央：如）とその妻二人（向かって右：妙、左：智）の墓石である。日付はそれぞれが亡くなった日である。以下に文字の大きさと彫りを示す。他の墓石と彫りが異なることが良くわかる。

佐吉による松尾家墓石“貞”（妙の）：縦 7.2、横 5.0、右払い深さ 1.9 cm。“信”（智の）：縦 5.3、横 6.5、人偏上深さ 1.6 - 1.7 cm。

隣の墓石 嘉永五子年五月十二日“貞”：縦 6.2、横 4.9、右払い深さ 0.7 cm。

近くの墓石 明治二巳歳四月十五日“信”：縦 5.6、横 7.0、人偏上深さ 0.9 cm。

同墓地中の笠つきの墓石 3基中向かって左 文久癸亥二月五日卒“信”：縦 3.0 cm、横 4.1 cm、人偏上深さ 0.7 cm。



梅毒が多くの人々に見られたにしても、なぜ佐吉がその病気にかかったかが問題である。というのは、佐吉は若い頃からずっと酒も飲まず、妻帯せず、ひたすら石の彫刻に打ち込んでいたと言われて⁶⁾。そのような人物がなぜ梅毒にかかったのか。

神岳神社の狛犬を作った時、症状が進んできたとする、それにかかったのは、岸和田狛犬奉納以前の頃か、あるいはもう少し前の柏原・八幡神社狛犬奉納の後あたりであろうか。金森氏³⁾は、大和の狛犬を作っている時（第Ⅲ期）既に罹患していたと考えている。それは、縦長な狛犬の印象からである。

しかし、これは、柏原・八幡の狛犬を作るために試行錯誤している中の狛犬であって²⁾、ここに気が緩む隙はない。また気の弱っている気配もない。柏原・八幡の後とすると、考えられるのは、力の限りをつくして作りあげた狛犬の完成を見て気が緩んだ可能性、あるいは他に何かを考えていた可能性である。

この時期何を考えていたのかを知るためには後の作品から考えてみる必要がある。狛犬第Ⅳ期の後に来るのは、大阪舍利尊勝寺役の行者像と園部摩気神社狛犬である。特に摩気神社狛犬は、柏原・八幡の狛犬とはさらに一線を画したものになっている。しかし第Ⅳ期の狛犬はどれも試行錯誤の形跡を見せていない。この時期、狛犬について検討せず、しかし、その後いきなりの飛躍を遂げているわけである。これは、ほんやり過ごしたのではなく、何かに打ち込んだ上で、それまでにない飛躍を遂げたと考えた方がよい。その摩気神社の前にあるのは、舍利尊勝寺役の行者像である。

時代はいよいよ動き始め、文久3年(1863)3月4日(佐吉は大和で、阿波神社の狛犬を作っている頃か?)14代将軍家茂が上洛し、4月26日大坂御船手佐野時行の役宅に立ち寄り、船蔵等を視察した¹²⁾。7月薩英戦争。11月21日大坂大火。翌文久4年(1864)1月8日将軍家茂再度来坂、同15日入京のため伏見まで御船手同行警護¹²⁾。上山治郎右衛門有績は大坂勤番中であり、極めて多忙。

11、狛犬第Ⅳ期と舍利尊勝寺

舍利尊勝寺(大阪市生野区)には幕末期に作られた西国三十三所巡り石仏群がある。門前の案内板によると、当時寺は何度目かの荒廃期にあり、石仏群造建は、再興をはかった32代幸道和尚による大事業である。この石仏の多くは、大きな石に小さな仏像がはめ込まれているという変わった趣向である。仏像だけは細かな細工のためであろうか和泉石で作られている。その多くは、基壇が納骨室になっており、寄進者名やその家族であろうと思われる戒名が書かれている。住職の奥さまの話では、石仏基壇の下から、石塔が出てきたりすることもあり、多くの墓を纏めている可能性もあるとのことである。また現在は順番も乱れて窮屈に並んでいるが、それは、地所の一部を住宅に貸していることによって移動した結果であると思われる。本来は順番に巡っていけるようになっていたはずである。安政2年(1855)頃から開始³⁾とされているが、最初のもは33番華嚴寺で、嘉永6年(1853)と見られる(本体彫刻の年号“欠 癸丑十一 欠”より)。時期不明を除いて最後は池の中央30番宝嚴寺(安政七1860庚申年二月造立)である。制作のピークは安政4、5年頃である。三十三所の完了後になって番外として佐吉の行者像が寄進された。番外は他に二つ、弁才天(慶應二年1866丙寅五月)と毘沙門天(慶應二年1866丙寅十月建立)である。



舍利尊勝寺石仏の一つ

○舍利尊勝寺役の行者像（三幸 他力 元治元1864甲■年五月吉日建之）

大阪市生野区舍利寺。金森1988³⁾。

行者像は鉄の扉のある石の祠に納められている。祠基壇には多数の人の名があるが、佐吉の銘は祠にない。

行者像は1石から彫り起こした極めて精密な彫り。役の行者は口を開け、笑っている。従来の佐吉には全く見られない新しい境地。佐吉49歳。祠は他のものと同様で特別ではない。文字の彫りも異なる。佐吉は役の行者のみを彫り、祠は別の石工の仕事かもしれない。



ここでは細密な仏像を彫ることが望まれていた。佐吉が極めて細密な彫りを見せたのも、その要請に応えたと見るべきである。

上記したように三十三所石仏最初の奉納は嘉永6年(1853)11月である。佐吉はその頃宇陀にいて、中央45番岩谷寺不動明王に続いて力作大師山立江寺地蔵を嘉永6年(1853)4月に奉納して

いる。この驚異的な作の噂は鳴り響いたであろう。それが、この舍利尊勝寺のプロジェクトに影響を与えた可能性がある。舍利尊勝寺プロジェクトの基本的なコンセプトは大きな岩に小さな仏を納めることである。つまり大師山立江寺の大きな石祠に納まった小さな仏を念頭に置いていることになる。ところが舍利尊勝寺の三十三所石仏では、写真(29頁)のように大きな自然石に小さく穴を開けて、ここに和泉石の仏を納めるという形で、その条件をすり抜けているものが多い。しかし、中には石祠を作って納めている例もある。その代表が18番頂法寺(時期不明)で、三十三所の中で最も良いものである。石祠も仏も文字の彫りもバランスがとれて美しい。

一方、とことん細密さを極めたものもある。11番上醍醐寺(時期不明)では、鉄扉付きの祠に入っていて、仏像は細い花軸の蓮の上にいる。これは寺の話によれば佐吉の作かもしれないとのことであるが、仏の顔から、佐吉ではないと断定できる。

<佐吉以外の人物の作>



11番上醍醐寺。この作りは尋常ではなく、佐吉に対抗心を燃やしている人物

(石の尺八で負けた?) の作かもしれない。11番は三十三所の中にあり、

佐吉が役の行者を奉納するよりも前の制作となる。

このプロジェクトは奉納年から考えて、佐吉が安政3年末から4年初頭頃に丹波大新屋から大坂に帰ってきてからの数年が最も盛んであった。大坂市街地に近いので、宇陀のようにチーム合宿形式ではなく、参加職人が増減・交替する形の事業であっただろう。奉納年代からも初めは少なく小規模から始めたらしいことが伺える。三十三所の中には、大宇陀で一緒だった職人も参加しているようである。25番清水寺(安政五1858戊午八月造立)の仏の顔は、大師山の中の一人の職人が作る顔にそっくりである。佐吉と寝食を共にして過ごした職人は大きな信頼を得ていたに違いない。知り合いがいることから、佐吉もこの現場に来ることがあったであろう。そうした折に、住職から、いつか何かをと依頼され、いつでもいいのなら、というような形の約束ができたとしてもおかしくない。佐吉はしかし、大坂に帰ってから狛犬に力を注ぎ、他を作る余裕がなかった。柏原・八幡を終わった段階で、佐吉は狛犬を終わったと考え、いよいよ舍利尊勝寺にかかることにしたのではないだろうか。ところが、その頃舍利尊勝寺では事業は終了しており、番外を作る段階に入っていたのである。そこで、佐吉は番外の何かを作ることにした。番外には、現在役の行者のほかに、弁財天と毘沙門天がある。両方とも慶応2年1866の作で、佐吉の当時としては何を作ってもよい状況だったように見える。

大きな岩を削り抜いて石祠を作り、精密な仏を納めるのは、佐吉にとって経験の無いことではない。そこでとにかく作ってみようとしたが、手も足も出ない状況に入ったのではないだろうか。柏原・八幡で最高と思われる狛犬を作り上げたこの時期の佐吉からすると、従来の佐吉の仏像では納得できなかったのに違いない。人の顔を持った真の仏を作るのは簡単ではないことが、作り始めてすぐにわかったのだろう。

ここで、佐吉はいろんな仏像にあたって、勉強する必要を感じ、大和に行き勉強することにしたのではないだろうか。大和には知り合いがいるし、仏像もたくさんあり、世話になりながら、行く先でお礼の狛犬を気軽に作ったのが第Ⅳ期の狛犬と考えられる。この間、仏像は残っていない。思わしいものはできなかった可能性がある。最初に大和・沢にいてめぼしい成果を上げられず、岸和田からの狛犬の依頼に応えることにした。ここまでが比較的長い。真の仏を作ることは難しく、苦しんだのであろう。

岸和田で、あるいはその前に立ち寄ったかもしれない大坂で、地獄に堕ちたのではないか。神との約束を破ったのである。それが苦しさの余りなのか、地獄の中で何かを見極めようとしてのことなのかはわからない。

当時のこととて、病気になるべくしてなった。それは徐々に進行した。しかし、岸和田・兵主神社の狛犬を終わらせ、斑鳩でさらに悶々としている内についに彫ることに支障が出てきた。やむなく治療に専念する必要が出たのである。天罰ともいえよう。沢・白山を終わってから斑鳩・神岳まで2年弱である。白山の後、間もなく罹患したとすると、第二期梅毒中で、発疹、脱毛、爪甲炎に加えて、内臓・五官器等の炎症を併発する²⁶⁾。これは梅毒としての最終段階ではない。しかし、力と精密さの要求される仕事の中では困難が生じる可能性がある。佐吉としては大急ぎで治療したいに違いない。

当時梅毒の治療には、安永4年(1775)に来日したツンベルクによってもたらされた水銀治療法が行われるようになっていた²⁶⁾。大坂にも水銀治療のできる医師がおり²⁶⁾、また、佐吉は宇陀の関係で薬種問屋とは知り合いである。すぐに手配ができ、薬の調合をしてもらったに違いない。金森³⁾の言うように佐吉はこの病気を隠し、渡りをしながら流れて泉州に到達したのではなく、初めから行くことを了解されて、まっすぐに行ったと考えられる。この治療法は激烈で、だれかの庇護のもとにはならない。治療の様子を纏めると、服薬一回り7日、数日にして口中腫れ、爛れ、痛み、大量に涎を垂らし、食することできず、言うことがわからず、虚弱な人はこの治療に耐えられず続けて薬を飲めなくなる、中には毒にあたって骨うずきになるものもある、という激烈さである²⁶⁾。症状に応じて服薬幾回りが実施されるようである。“骨うずきになる”とあるように後遺症が残る可能性があり、泉州に行った理由は、その水銀による後遺症を少しでも軽くするためであろう。海辺でヨウドの多い食事をとることが水銀中毒症状を軽くすると理解されていたのではないだろうか。

幸い佐吉は治癒した。体力と意志力では人後に落ちない佐吉と思われるが、しかし、この治療の中で確かに佐吉は地獄の中にあつたに違いない。そこから帰還したことで、それまでとは違う世界が開けたとあって良いだろう。治療後佐吉は念仏を唱えながら、墓石を彫っていたとの言い伝えがある³⁾。生きて光を浴び、空気を胸に吸えることが有り難い、海にも山にも、木々にも溢れる日の光にも神や仏が宿るという実感を得たに違いない。

泉州から大和川付近までの山間部は、役の行者が開いた葛城の行場である。この行場であることを実感し、佐吉は役の行者を彫ることにしたのではないだろうか。役の行者は、口を開けて笑っており、実に柔らかな平和な顔である。佐吉のこれまでの口を引き結んだ顔から大きな飛躍を遂げた。

12、園部

役の行者像の後に、佐吉は園部の摩気神社狛犬を作るために出発する。ほぼこの頃に、橿原市牟佐坐神社の狛犬(慶応■元1865乙丑年六月■建之)^{1), 2)}の依頼があったのだろう。しかし、佐吉はもう何の依頼も受ける気持ちがなかったとみえる。やれる限りのことは成し遂げ、後は若い日に願をかけたに違いない園部摩気神社にお礼に行くことと故郷に行くことが残っているだけである。若い弟子に狛犬

をまかせ、恐らく知り合いであった村人への感謝の気持ちと弟子へのはなむけとして、近くの久米御縣神社の“奉獻”の拓本²⁾をとることを許したのであろう。

○摩気神社狛犬（寄進年なし、照信花押、阿：干時祠堂上田正延、5人の名、世話人森田源兵衛、吽：5人の名、世話人辻田栄治郎）

京都府南丹市園部町竹井。小寺1999¹⁸⁾、磯辺2007^{1)、2)}。

狛犬第V期。他とは異なる。舍利尊勝寺の後、最後の上山家不動明王の前と推定される²⁾。恐らく慶応元年（1865）。左右の狛犬は拝観者側を向かず相対する。写実的な顔で躍動感がある。

佐吉が、園部に急いだかどうかは不明である。しかし、園部の狛犬が、それまでの最高峰である柏原・八幡の狛犬とはまた一線を画し、全く違う境地に入っていることを考えると、佐吉は急がず、狛犬の構想を練りながらゆっくりと行ったと思われる。園部の狛犬の毛流れや躍動感のあるリアルさは、京都にある鎌倉時代の木彫狛犬²⁷⁾などに近い。

園部で、若い頃に、生涯“飲む、打つ、買う”を行わないと誓ったとすると、佐吉はその一つを破ったわけである。さらに飲んだかもしれない。それによって地獄を見たものの、新たな境地に達することができた。地獄の入口に来るまでは、園部の神様には再びまみえないつもりだったかもしれない。しかし、役の行者像を完成させることができた段階で、約束を破った自分にも神がまだ微笑んでいることを感じ取り、泥にまみれた体ながら、最後の神にささげる狛犬を作れる気がしたのであろう。ここではもはや柏原での気持とは大きな相違のあるところである。さらに“奉”の文字が、最後の狛犬で、伊助のもの（加茂神社 安政二年1855）とそっくりであることから、伊助への思いがくみ取れる。

世の中はますます騒然としていた。佐吉が大坂の舍利尊勝寺で行者像を奉納（元治元年1864年5月）した後、同年6月5日池田屋の変、7月禁門の変、第一次長州征伐開始と続く。この動乱の中で、佐吉は園部の狛犬に向かうべく京のあたりにいるのであろう。一方、大坂では、同年5月幕府は大坂御船手を廃し、佐野時行は同役を免ぜられる¹²⁾。残務処理の後、上山治郎右衛門有績も丹波に帰ったのである。佐野時行は翌慶応元年（1865）3月、佐吉が園部にいると思われる頃、亡くなっている¹²⁾。

13、最後

佐吉は最後に大新屋に向かう。「新井村誌」¹⁴⁾に“晩年精神に異常を来したので大新屋に帰り静養したが、治せず遂に一日飄然と家を出て帰らず、為に其の終わる所を知らない”とある。精神を病み療養するために帰ったということである。帰ってきた佐吉を見て難波家や周囲の人々はそのように理解したのであろう。佐吉は説明しなかったに違いない。梅毒が脳梅毒の段階に進んではいなかっただろうことは、こちらの記録に梅毒とはなく、精神を病んだとされていることで推測できる。つまり、梅毒はよく治癒したが、水銀中毒症状が残ったのであろう。しかし、最後の摩気神社の神に捧げる狛犬を作った身では、もう何も作ることはなかったのである。故郷に後遺症を持った身で何をしたかったのだろうか。

ここで残っているのは、上山家の不動明王である。

○上山家の不動明王（慶応二1866丙寅二月旦。右：作人 但州竹田産村上照信花押。左：上山治郎右衛門有績）

丹波市柏原町大新屋。「丹波氷上郡志」⁶⁾、金森1988³⁾。



不動明王立像。火炎は透かし彫りで、上部は頭の上にかぶさるように前が出る。腕は細め。治郎右衛門有績あて。佐吉51歳。

治郎右衛門有績に最後の挨拶をしたかったのだろうか。それもあがるが、他に必要を感じての帰郷と考える。以下に述べる佐吉の心については、次の項の“14、その後”に出てくる二代目に関する言い伝えを勘案してからの推測である。

佐吉は、世話になった人に対しては必ず力の限りの大変美しい作を礼として残している。かなり律儀な性格だったと思われる。そこからすると、佐吉が最後に大新屋に帰るのには、かつての伊助の願いが重要になる。伊助は、二代目のことをよろしくと言いたかった。そのために佐吉を呼んだということは言わず語らずの中に佐吉には理解できたに違いない。しかし、二代目は佐吉に対して距離をとったし、佐吉もそれ以降夢中で生きてきた。特にどうすることもなかったのである。しかし、自分の能力に限界が訪れ、死もまた遠くないと自覚した時に、死の床で願った伊助の願いを無視することができなくなったのではないだろうか。佐吉に残された最後の仕事なのである。

佐吉は黙って帰り、体を休めると、後は黙々と不動明王を彫り始めたに違いない。治郎右衛門有績からの依頼ではなく、自分から彫ったのであろう。不動明王は、37歳の時の大師山45番（8頁）と比べると、肩、腕、胴部がやせて胴部に力のない印象である。胴部は病中の佐吉を思わせる。しかしそのノミさばき、石扱い、その気になってみれば、学べることはいくらかあったのである。佐吉は不動明王の背の火炎を透かし彫りにしている。しかも火炎は頭の上にせり出している。二代目が最も苦手としたのはこの透かし彫りである。以降の彼の作の中では、狛犬で挑戦しているが成功しているとは言い難く、そ

れ以外にはない。かつてしばらく難波家に滞在していた間に、佐吉は彼の力量を見て取っていたに違いない。一方、二代目は既に町では働き盛りで、精神を病んでいるような佐吉をいくぶん敬して遠ざける、したいようにさせておくという姿勢だったのではないだろうか。

不動明王が完成すれば、もはやこの場所にいる意味がないのである。慶応2年（1866）2月、佐吉は不動明王を残して去った。以前上山家に奉納した狐には、自分のことをただ“作人照信花押”とだけ記したのに対し、今回は、“作人但州竹田産村上照信花押”と完全な署名である。強く最後と認識したからであろう。翌慶応3年（1867）大政奉還。明治は目前であった。

14、その後

二代目には、その後次のような話が残っている。「丹波水上郡誌」⁶⁾に“大和長谷寺の観音を丹波佐吉に命じて彫らしめしに中途病に罹りて遂に成功せず、寺僧大いに惜み、佐吉に其の後継者を物色せしむ、佐吉即ち二代目金兵衛を薦めてこれに成功す、慶応三年の頃同寺狛犬の前足に踏める手毬を透彫せし時、同業者の嫉を受けて毒を差められ、為に久しく四肢の自由を失ひしが、帰郷回復後益々斯業に精勵せり”とある。佐吉が行方不明になってから、しばらくして、二代目のところに大和長谷寺の和尚から依頼が来たのである。佐吉が残した長谷寺観音の続きを佐吉は二代目に託したいと言っているというものである。そこで二代目は長谷寺に行ったが、そんな話はなく、近くの神社に狛犬を奉納して帰ってきた。その狛犬には透かし彫りの玉があり、他の石工から妬まれて、毒を盛られ、帰ってからも当分仕事ができなかったというのである。これは不思議な話である。

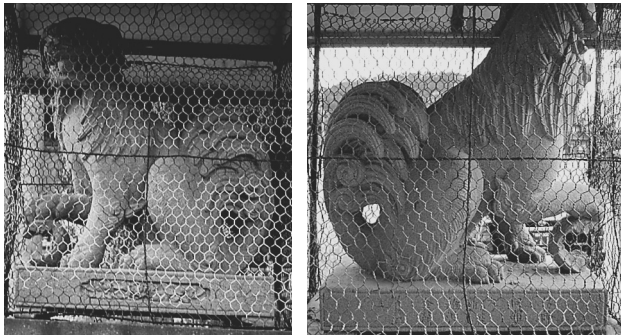
金森氏³⁾は、佐吉の推薦を、彼から二代目への長い嫉妬に対する一方的な和解の申し入れと考えている。そして、この長谷寺観音は、大師山の途中で終わっていた長谷寺式観音のことであり、狛犬は、球をもっていないものの長谷寺横の天満宮（興喜天満宮）の狛犬かもしれないと考えた。

まずこの狛犬であるが、本殿前石段下の大きな狛犬（慶応3年1867）は実に典型的な当時の浪速狛犬の一種である。かなり出来は良く、地方の石工ではなく大坂の石屋に作らせたものではないかと思われる。後に二代金兵衛が作った大崎神社狛犬（明治6年1873）の優しげな印象とは全く異なる。この神社は神山である興喜山の西南麓にあり、菅原道真を祀り、長谷寺と深い関係にある^{20), 28)}。大和では、大坂に腕のいい職人がいくらもおり、“長谷寺門前町…初瀬郷鎮守”²⁸⁾の狛犬を、いきなりやってきた地方の石工に任せるとは考えられない。この不思議な話を解く鍵はやはり佐吉であろう。

佐吉は難波家を出て、やるだけのことはやったと考えただろう。しかし、それでも二代目に何かを伝えることができたかと問われれば否である。自分の責任ではないというものの、伊助の願いをかなえていないことには違いないのである。時間がたつほどに、伊助の願いをかなえる必要を感じたのではないか。最後の手段は、佐吉自身の作に語らせることである。そして上記の手紙である。長谷寺の和尚とは知り合いだったに違いない。名を騙って書いたか、長谷寺の和尚自身に依頼したかのどちらかである。案の上、二代目は興味をそそられて大和に行った。長谷寺まで行けば、大師山は目と鼻の先である。長谷寺で、そのような観音はないけれども、佐吉さんのことなら、せっかくだから大師山に行ってきた

いと勧められたに違いない。寺の和尚だけでなく、町の人々もみんなそのように言ったに違いない。そこで、彼は行ってみる気になったのである。

山に行って彼が得たものは、衝撃だったに違いない。ここで初めて彼は自分の腕と佐吉の腕の違いについて、震えるほどの思いで気がついたのであろう。何よりも佐吉の透かしの技術はすごいものがあった。家に帰った二代目は、ふさぎこみ、石を彫れなくなったに違いない。家族や知り合いが訝しんだのに対して、彼は毒の話をもって返事し、彫れないことの原因としたのであろう。そのまま時間を過ごす中でようやく彼は、伊助の願いや佐吉の考えに思い至ったのではないだろうか。自分が井の中の蛙であったことにも気がついたのではないだろうか。ようやく謙虚にこれら二人の作から学ぶようになった。佐吉の願いはこうして最後の最後に伝わったのである。二代目は明治になってから、ほちほちと銘のある作を作るようになり、名人とうたわれた。



<二代金兵衛の作>

彼の作としては、大崎神社狛犬（明治6年1873）、高山寺弘法大師（明治17年1884）、当勝神社稲荷狐（明治23年1890）、明願寺薬師坐像（明治33年1900）などが知られている。

大崎神社の狛犬（写真左及び下、二代金兵

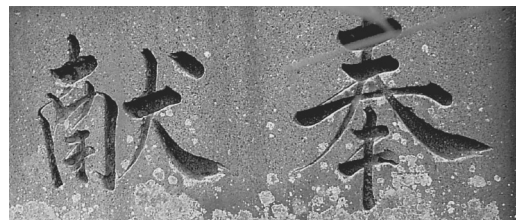
衛37歳）では、阿像の前脚の下に玉があり、尾も柏原・八幡の佐吉の狛犬に倣ったらしく、根元が貫通して前流れになっている。脚下の玉は壊れていて、恐らく透かし



彫りを試したものが、きれいに均等にならず、後に壊れた

のではないだろうか。“奉献”の文字は、北山稲荷と同じ人物の文字であることは確かであるが、より練れて伸びやかである。最後の明願寺薬師坐像（写真左、64歳）の光背には透かしがない。佐吉の場合必ず透かしにする部分であるが、二代金兵衛はもうそれをしないのであろう。

彼の仏像と狛犬はいずれもおとなしく優しげである。66歳という当時としては全うした寿命の中で（明治35年1902没¹⁴）、じっくりと自分なりの精進をする姿勢を持ち続けた。それは伊助と佐吉の二人の願いであった。



おわりに

佐吉のその他について記述し、狛犬も含めて大師山石仏群の一部を除くほぼ全ての石造物を年代順に整理した。先に狛犬について整理した時、狛犬第Ⅳ期について理解するのは、佐吉の病氣と舍利尊勝寺

の役の行者像を考察しない限り困難であり、その点についてまだ言及しないでした。それを今回解明しようとしたわけであるが、佐吉の人となりを知るために結局佐吉の生涯をたどることになった。その作業の中で、難波金兵衛一・二代目父子と上山孝之進成績・治郎右衛門有績父子という二組の親子にもつき合うことになった。特に上山父子は、激動の大坂で幕末期の治世に直接関わっていると同時に、佐吉の生涯にも深く関わっていることが一層明瞭になった。この二人の佐吉への影響は非常に大きいであろう。孝之進は大変有能であるが、温厚とも評されている。大きな土木工事を進めることができ、同時に財政に明るく佐野家の借金返済にあたっては大坂の両替商などとのねばり強い交渉があったに違いない。温厚篤実であるとともに強い意志を持った人物で、人の信頼を集めることのできる人であっただろう。息子の治郎右衛門有績も基本的に同様な性格を受け継ぎつつも、記録と資料の整理に情熱を燃やす人であるようだ。上山家文書は幕末期の記録として大きなものがある。有績もまた篤実である。佐野時行没後も佐野家を支え続け、慶応4年（明治元年）（1868）秋以降1年半にわたって佐野家主従を大新屋に受け入れ、11月には関東の佐野家領地の取り締まりとして1カ年の江戸詰めを命じられている¹²⁾。

佐吉の作る仏の顔は独特で、面長で穏やかな中に意志的な口元をしている。この顔は、佐吉自身にも、上山父子にも近いのではないだろうか。佐吉の生涯をたどると、口元を引き結んでいる姿が似合っている。

彼の作る石造物は美しい。仕上げがきれいで細かな細工が目につく。現在の感覚では、石造物は素朴で稚拙なものの方がより味わいがあると感じる。機械彫りでは仕上げは滑らかであるが味わいはない。そこでわざわざ滑らかでない仕上げにする位である。しかし、かつては全てが手で彫られていた。幕末に至って大衆の中で手彫り石造物文化が最高潮に達した頃の石造物を見る時、そのことに立ち返る必要がある。当時、手作りだが規格化された既製品が出回る中で、石を越えて造形上自由度の高い木造や金属製の仏像などに迫ろうとした動きがあったようである。佐吉は常にそのようなものを目指したに違いない。手本を石に求めず木造や金属製のものに求めていたと思われる。その中で、彼は、手本そのままではなく狛犬でも、灯籠でも、仏でも常に独自の境地に至ろうとし、そこに到達したといえるだろう。その最後が口を開けて笑っている役の行者像に、相對して躍動する狛犬になるのである。

多くの方々のご厚意によってここまで達することができた。特に、上山家当主上山勝也氏には、お忙しい中をわざわざ来て、懇切に上山家にご案内頂き、所蔵の狐と不動明王を見せて頂いた。また、多くのお話を聞かせて頂いたことで、上山孝之進父子の風貌にも近づくことができたように思う。また、丹波市教育委員会文化創造課文化財係主査・学芸員高雄由紀子氏には、上山家文書の閲覧・撮影にご尽力頂いただけではなく、思いもかけず上山勝也氏に引き合わせて頂くと同時に、狐と不動明王撮影の機会を作って頂いた。さらに文献も調べておいて頂いたおかげで、今回上山孝之進父子について良く理解することができるようになった。お二人には心から感謝の意を表したい。舍利尊勝寺の奥様を始めとする皆様にも、役の行者と11番の石祠を開け、像を見せて頂いたこと、多くのお話を聞かせて頂いたこと、石仏の見方を教えて頂いたことなど、ひとかたならずお世話になった。ここに篤く感謝する。

文献収集には兵庫県立図書館地域資料室、丹波市立図書館に御世話になった。また、上山家文書調査に協力して頂いた磯辺真理氏、石造物調査に協力して頂いた友人達に深謝する。

なお、金森氏の作には多く反論することとなったが、氏の作に導かれてここまで来たことを付記して、

深謝の意を表したい。先人の跡を歩くのははるかに容易なのである。

引用文献

- 1) 「丹波佐吉の狛犬1－記載」 磯辺ゆう著 2007 奈良文化女子短期大学紀要38：19－30。
- 2) 「丹波佐吉の狛犬2－考察」 磯辺ゆう著 2007 奈良文化女子短期大学紀要38：31－42。
- 3) 「旅の石工－丹波佐吉の生涯」 金森敦子著 1988 法政大学出版社。
- 4) 「但馬の城と城下町 出石城/豊岡城/八木城/竹田城/村岡陣屋を探る」 谷本進著 1994 但馬考古学研究会。
- 5) 「郷土史 南但竹田－古代から現代まで…その二千年－」 大阪竹田会発行 昭和44年1969 青山書店。
- 6) 「丹波氷上郡志」 丹波史談会編 昭和2年1927（昭和60年復刻1985）臨川書店。
- 7) 「近世江戸時代以降における竹田の災害史」 藤本義宏著 昭和63年1988 和田山町の歴史6：1－27。
- 8) 「朝来志」 木村發著 明治36年1903（昭和60年復刻1985）臨川書店。
- 9) 「竹田誌 上」 木村發著 大正8年1919 竹田村役場。
- 10) 「上山家文書」 丹波市教育委員会蔵。
- 11) 「その後の佐野家_旗本三千五百石」 大高八三郎著 1991 史談会報7：29－54。
- 12) 「幕末・維新期の旗本佐野氏の動向」 大高八三郎著 1994 史談会報10：27－56。
- 13) 「江戸時代の佐野家」 大高八三郎著 1992 史談会報8：75-124。
- 14) 「新井村誌」 鈴木末吉編 昭和34年1959 新井村誌編集委員会。
- 15) 「増訂丹波史年表」 松井拳堂著 昭和35年1960（昭和62年復刻1987）臨川書店。
- 16) 「新修大阪市史 第四巻」 新修大阪市史編纂委員会編 1990 大阪市。
- 17) 「大阪堀江今昔 堀江三十三橋 橋づくし」 水知悠之介著 2003 燃焼社。
- 18) 「京都狛犬巡り」 小寺慶昭著 1999 ナカニシヤ出版。
- 19) 「狛犬の研究－大阪府の狛犬－」 奈良文化財同好会 1999 奈良文化財同好会。
- 20) 「小学館ウィークリーブック 古寺を巡る7 長谷寺」 2007 小学館。
- 21) 「狛犬の歴史」 藤倉郁子著 2000 岩波出版サービスセンター。
- 22) 「菟田野町史」 菟田野町史編纂委員会著 1968 菟田野町役場。
- 23) 「丹波人物史」 <http://kirinosato.fc2web.com/tanbaJINBUTU-02.htm>
- 24) 「図説日本の“医”の歴史 上 通史編」 小池猪一著 1993 大空社。
- 25) 「大阪狛犬の謎」 小寺慶昭著 2003 ナカニシヤ出版。
- 26) 「江戸の性病 梅毒流行事情」 刈谷春郎著 1993 三一書房。
- 27) 「狛犬事典」 上杉千郷著 2001 戎光祥出版。
- 28) 「桜井市史」 桜井市史編纂委員会編 1979 桜井市役所。